中国電力活断層（トレンチ）調査に伴う

南講武小廻第２遺跡発掘調査報告書

１９９９年３月

島根県　鹿島町教育委員会

中国電力活断層（トレンチ）調査に伴う

南講武小廻第２遺跡発掘調査報告書

例　　言

1．本書は、中国電力株式会社島根立地調査事務所の委託を受けて、鹿島町教育委員会が実施した南講武小廻第２遺跡の発掘調査の記録である。

2．遺跡の調査地は、島根県八束郡鹿島町大字南講武379番地に所在する。

3．調査は、平成10年５月６日から６月10日まで行った。調査の体制は以下のとおりである。

事　務　局　　鹿島町教育委員会　教　育　次　長　青山　甚一
同　　文化振興係長　赤澤　秀則
調 査 指 導　　田中　義昭（島根大学法文学部教授）
石井　　悠（宍道町立宍道中学校教頭）
守岡　正司（島根県教育庁文化財課）
調　査　員　　杉原　清一（鹿島町教育委員会嘱託）
藤原　友子（鹿島町教育委員会嘱託）

4．調査にあたっては、土地所有者中村文雄、井上貴央（鳥取大学医学部第２解剖学教室）、応用地質株式会社、鹿島建設株式会社島根営業所、中国電力株式会社島根原子力事務所の各位に多大なご協力をいただいた。この場を借りて厚くお礼申し上げます。

5．報告書の作成にあたっては、以下のように分担して行なった。

執筆　Ⅰ、Ⅱ章 赤澤秀則、Ⅲ～Ⅶ章 杉原清一
編集　杉原清一・藤原友子
原稿浄書・トレース　藤原友子

6．付編として１．標本土壌の簡易粒度分析（杉原清一）、２．放射性炭素年代測定結果報告（株）地球科学研究所を掲載した。

目　　次

Ⅰ　調査の経緯 …… 1
Ⅱ　位置と歴史的環境 …… 2
Ⅲ　調査の概要 …… 4
Ⅳ　土層について …… 5
Ⅴ　遺物の検出状況とその基盤 …… 8
Ⅵ　遺物 …… 10
　土器　甕・壺　鼓形器台　高坏　台付坏等　須恵器　小結 …… 10
　石礫器 …… 24
　木製品等 …… 26
Ⅶ　まとめ …… 30
付編Ⅰ　標本土壌の簡易粒度分析 …… 杉原　清一 …… 32
　Ⅱ　放射性炭素年代測定結果報告書 …… (株)地球科学研究所 …… 34

挿　図　目　次

図1　南講武小廻第2遺跡と周辺の遺跡 … 3
2　調査区図 …… 4
3　土層図 …… 7
4　遺物散布状況 …… 9
5　遺物図（1） …… 10
6　〃　（2） …… 11
7　〃　（3） …… 12
8　〃　（4） …… 13
9　〃　（5） …… 14
10　〃　（6） …… 14
11　〃　（7） …… 15
図12　遺物図（8） …… 17
13　〃　（9） …… 18
14　〃　(10) …… 19
15　〃　(11) …… 20
16　〃　(12) …… 20
17　〃　(13) …… 21
18　〃　(14) …… 22
19　〃　(15) …… 23
20　〃　(16) …… 25
21　〃　(17) …… 27
22　〃　(18) …… 28

図　版　目　次

PL 1　発掘状況
2　土　層
3　遺物散布状況
4　遺物検出状況
5　完掘状況・現地説明会
6　弥生前～中期土器
7　弥生中期末～後期前葉土器
PL 8　弥生後期土器
9　弥生末期～古墳中期土器
10　施文・底部片
11　小形丸底壷・弥生期高坏
12　土師高坏・須恵器片
13　石礫器
14　木製品・その他

Ⅰ　調査の経緯

中国電力株式会社では、島根原子力発電所３号機増設計画に伴う広域地質調査の一環として活断層（トレンチ）調査を鹿島町内２か所において計画し、調査のための準備作業を行っていたが、２か所のうち、南講武の現場から平成10年４月15日土器の破片らしいものが出土したことが、翌４月16日、中国電力株式会社島根立地調査事務所から鹿島町教育委員会に連絡があった。

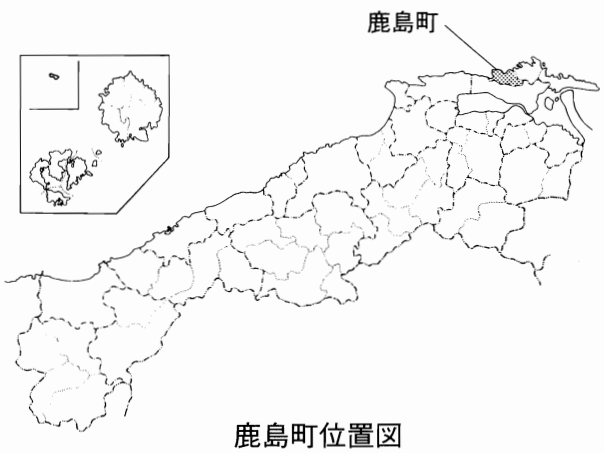
４月16日、町教育委員会担当職員が現地で立会いを行い、土器の破片らしいものは古墳時代の土器であることを確認した。また、これら遺物は、通常遺物包含層によくみられる暗灰色の粘質土に含まれていたため、単なる遺物の出土というより遺物包含層の一端が検出された可能性があった。よって、同地で待機していた重機によって試験的に地下の土層を確認したところ、地下１.5～１.9mの付近に弥生時代から古墳時代の遺物の包含層が存在することが明らかになった。また、このとき予定されていた工法では、トレンチの周辺も重機の作業ヤードとして掘り下げ、砕石を搬入することとなっており、トレンチ部分だけでなく、その周辺部に存在する遺物包含層も掘削される恐れがあった。このことを受け、町教育委員会では、県教育委員会文化財課と協議を行い、同地での埋蔵文化財調査が必要であることを確認し、中国電力株式会社に伝えた。しかし、この時点では町教育委員会は大字北講武・南講武にまたがる福祉ゾーン造成予定地での発掘調査に忙殺されており、このトレンチ部分の調査に割く余力がなかった。

その後協議を重ね、トレンチ周辺部は鋼製の床板を設置することで現状以上の掘削を避ける工法が採用されることとなり、調査が必要とされるのはトレンチ本体部分の20×５mの計100㎡に限定されることとなった。一方、発掘調査は、島根県文化財保護指導委員の杉原清一氏に担当いただけることとなり、中国電力株式会社島根立地調査事務所と鹿島町で委託契約を締結、文化財保護法上の手続きを経て、同年５月６日から調査に着手した。

調査では後述するように集落縁辺部の遺物包含層が明らかとなり、５月29日、調査現地をマスコミに公開し、５月31日には現地説明会を開催して、６月10日現地調査を終了した。

この後、調査結果をまとめ、県教育委員会と協議を行い、同地では弥生時代にはじまる農業集落の一端をうかがわせる遺物包含層は認められたものの、遺構が検出されなかったことなどから、同地での工事再開はやむをえないものと判断し、６月15日、その旨を中国電力島根立地調査事務所あてに回答した。

その後、再開された活断層調査において、この地点地下から活断層が検出されたことが発表され、８月19日、現地が一般公開された。



鹿島町位置図

Ⅱ　位置と歴史的環境

島根半島のほぼ中ほどに位置する講武盆地は、面積180haの水田を有しており、半島部においては持田・川津平野とならぶ広い耕地面積を有する。この盆地は、谷奥から流れだす講武川によって作られた肥沃な地味により、古くから水稲耕作地として格好の条件を備えていたものと考えられる。

南講武小廻第２遺跡は、この盆地のほぼ中央部の南寄りの扇状地末端に位置している。

この盆地をめぐっては、盆地西端に縄文時代前期のヤマトシジミを主体とする貝層をもつ佐太講武貝塚が知られている。これは現在の佐陀川沿いに開けていた潟湖をそれぞれ南と西にひかえた立地であり、こうした潟湖からヤマトシジミなどの魚介類を採集し、周辺の山野に鳥獣や堅果類を求めていたものと思われる。同貝塚の調査により、貝層中には貝ばかりではなく、堅果類果皮が大量に含まれていた。また、水洗選別の結果検出された魚骨は、コイ科のものが多く、魚もヤマトシジミ同様の潟湖から得ていたと考えられるようになってきた。また、近年の低湿地部の調査により、縄文時代前期にとどまらず、断続はあるものの縄文時代晩期前半までの生活があったことが判明している。

一方、従来縄文晩期の遺跡しか知られていなかった講武盆地内でも低湿地にある堀部第１遺跡では、縄文後期の遺物が大量に出土しており、盆地内での縄文人の動向、低湿地への進出など、興味深い状況がある。

弥生時代前期には、集落では盆地西端で佐太前遺跡が成立する一方、盆地内では縄文時代晩期の系譜をひく突帯文土器と弥生時代前期の遠賀川式土器が層位的に区別できない状態で出土した北講武氏元遺跡が知られている。さらに弥生時代中期の遺物を出土した名分塚田遺跡、弥生時代後期から古墳時代前期の南講武大日遺跡、堀部第２遺跡など、点々と集落遺跡の存在が明らかになってきている。弥生時代前期の点的な遺跡の分布に始まり、盆地全体が開発の対象となる時代までの変遷がたどれるようである。また、墳墓では、盆地内で同時期の大量の配石を伴い木棺を内部主体とする墳墓群、堀部第１遺跡が発見され、日本海沿いの砂丘での大規模な埋葬遺跡として知られる古浦砂丘遺跡と並んで注目される。南講武小廻第２遺跡の周辺には近畿庄内式土器や朝鮮半島製と考えられる瓦質土器など搬入遺物を多く出土した墳墓群である南講武草田遺跡、四隅突出型墳丘墓の可能性のある石列を検出した南講武小廻遺跡が知られており、墳墓においても弥生時代の具体像が結ばれつつある。

さらに弥生時代のうちには、この盆地から少し離れるが『出雲国風土記』にいう「恵曇陂」の南辺の山ふところに銅鐸・銅剣を埋納した志谷奥遺跡や、弥生時代中期を中心とする木製品を大量に出土した稗田遺跡がある。

古墳時代には講武盆地をめぐる丘陵上に数多くの古墳が築造されており、この時代までに盆地内での開発が進んだことを示している。特に名分地域では、名分丸山古墳群、奥才古墳群、鵜灘山古墳群など前半期にさかのぼる古墳群が分布し、特に奥才古墳群では石釧、紡錘車形石製品、小型の青銅鏡４面が副葬されていた。主体部も礫床を有する石棺や木棺で特徴的である。北講武地域には石棺式石室の講武岩屋古墳、須恵器子持壷を出土した向山古墳など、後期古墳が多く分布する傾向がある。

これら以外にも、横穴墓が多数知られており、古墳時代後期の段階には現在の集落の原形ができあがっているものと考えられる。また、古代から中世にかけての大規模な集落遺跡と考えられる堀部第５遺跡も北講武地域には所在する。

1．南講武小廻第２遺跡
2．佐太講武貝塚
3．古浦砂丘遺跡
4．佐太前遺跡
5．北講武氏元遺跡
6．堀部第１遺跡
7．志谷奥遺跡
8．稗田遺跡
9．名分塚田遺跡
10．南講武大日遺跡
11．堀部第２遺跡
12．南講武草田遺跡
13．南講武小廻遺跡
14．名分丸山古墳群
15．奥才古墳群
16．鵜灘山古墳群
17．岩屋古墳
18．向山古墳
19．雉ヶ崎荒神古墳
20．堀部古墳群
21．面目古墳群
22．狐堀古墳
23．尾坂古墳群
24．多久神社裏山古墳群
25．的松古墳
26．秋葉山古墳群
27．御津中の津古墳
28．御津貝塚横穴群
29．御津茶畑横穴群
30．恵谷横穴群
31．寺尾横穴群
32．寺の奥古墳群
33．寺の奥横穴群
34．中尾谷山古墳群
35．嵐廻横穴群
36．堀部第５遺跡

図１　南講武小廻第２遺跡と周辺の遺跡（１／50,000）

Ⅲ　調 査 の 概 要

中国電力（株）の行う地質調査のために掘削工事に着手した区域の南端付近で、地表下約70cmあたりから土器片が検出された。

掘削予定面は、地表下2.5mで５×20mとするため、その外周に法面帯を付けた範囲となることから、地表面では約10×25mとなっている。

埋蔵文化財発掘調査は、この経緯と状況をふまえ、耕作土及び近年行われた圃場整備工事による攪乱土層と、その下の旧状を保つ厚い水運堆積土層の半ばまでの無遺物層までを、重機によって排土したのちについて行った。この排土は地表下約１mで、北に深く南に浅くなっている。

この調査対象面は東西７m、南北20mで、この外周に湧出する地下水の集水溝を巡らせ、常時ポンプ排水しながら調査を行った。先ず、中央縦断とそれに直交する５m間隔の横断トレンチを設けて、土層序と遺物等の包含状況を把握することから始めた（図２）。

区分は北端から５m毎に１～４区（No. 1杭～No. 5杭）とし、さらに中央から東（E）・西（W）と分割して区名とした。

縦断面は概ね極く緩やかに北へ下降する土層の重なりで、遺物は南寄りに濃く、中央点過ぎあたりから北では無遺物の自然土層であった。

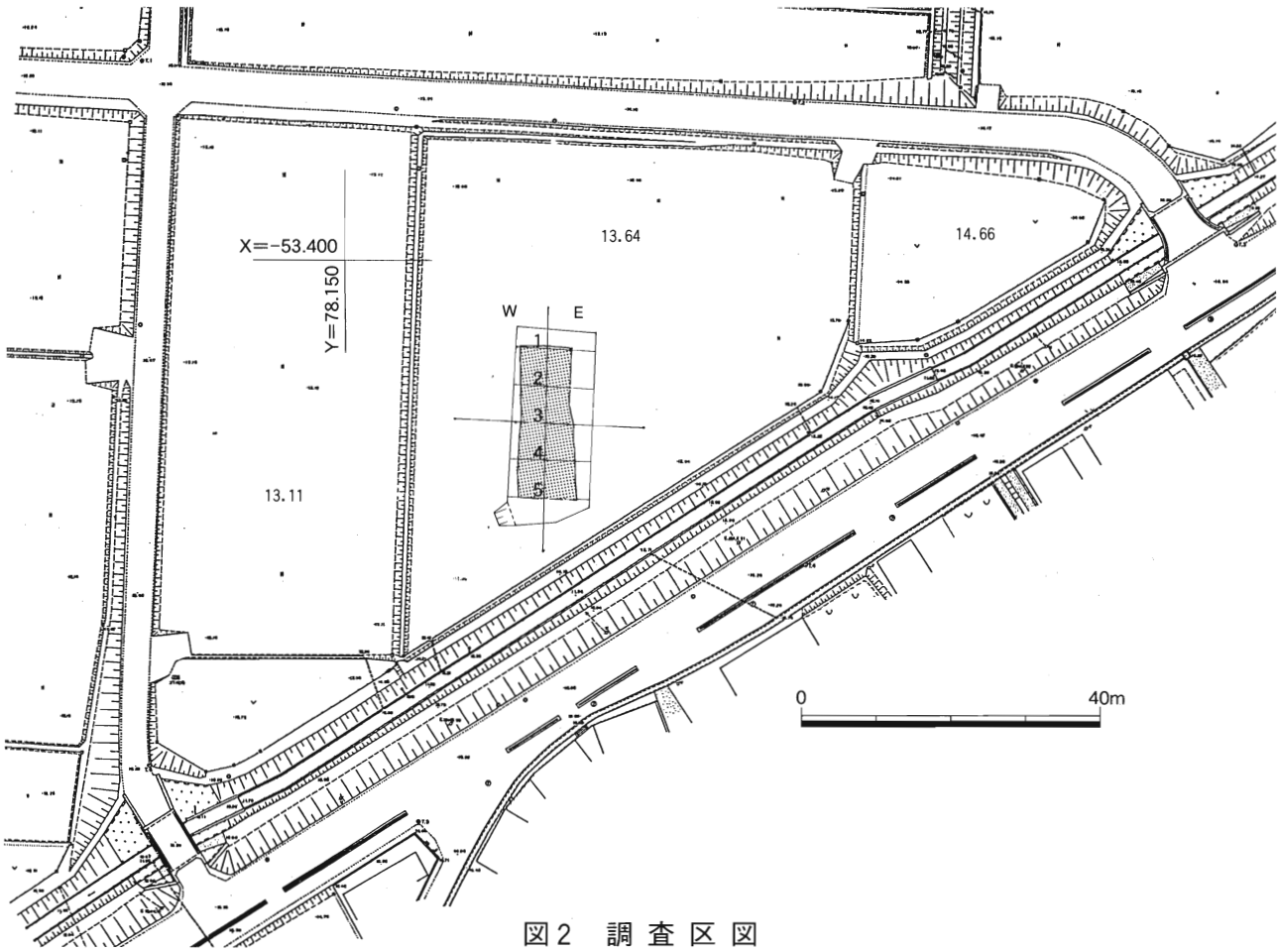


図2　調 査 区 図

また横断方向では、東（E）が若干高位で西（W）へ極く緩やかに下るが、縦断面とほとんど同様の層位であった。

これによって２区３ｍ点（中央点から北２ｍ点）以北は単なる自然土層のみで文化財には関与しないものと判断し、面発掘の対象から除くこととした。

遺物は、南端から約７ｍまで緩く下降する灰白色粘質土の上面と、その延長約５ｍの範囲に一面のみ散布していて、遺構はなく自然地形の面であった。さらにこの下約50㎝（地表から約2.7m）までトレンチを下げ、無遺物の自然土層であることを確認し調査を終えた。

Ⅳ　土層について

土層の観察は、中央縦断トレンチを主とし、５ｍ間隔で直交する１～５トレンチの状況を参照しながら行った。

ここには南北方向の縦断トレンチによって以下に記す（図３）。

図示したトレンチ土層は、地表（水田面）下約1.6mの重機による排土以下についてであり、土層図の上端は地表を示していない。主に眼視と触感によって上位から１～11の層序を区分した。概ねいずれの土層も広く平坦に全面を被うものであった。また標本採取した土壌については、別途に粒度分析を行って参考とした[註1]。

第１層：重機排土でわずかに残されたものであり、腐植を含む壌土で褐灰色を呈し、現行水田の下層土に近いものである。

第２層：シルト質の壌土で、細礫～粗砂を含み、地下水によって還元され灰オリーブ色を呈している。土層は厚く30～40㎝であるが、南端高位部は漸次薄く、上面は北端まで20m間でわずかに25㎝下る平坦な緩斜面をなしている。別記のように行った粒度調査から、シルト～細砂が主で粘土は少なく、緩慢な流れによって運ばれた堆積土層であることが判る。

またこの土層中には植物の茎葉が多く包含して残っている。その形状の低倍率観察で葦であることが判った。

第３層：調査区中央部あたりで第２層の下に薄くみられるもので、やや砂質で黄灰色を呈するが、第２層との区分は明瞭でなく、本質的に同起源の土層とみられる。

第４層：黒褐色の腐植に富む壌土でやや粘りがある。南端から２ｍほどは見られないが、それから５ｍばかり漸次厚みを増して、以北はほぼ水平に近くわずかに起伏しながら全面を被っている。これは旧地表土が雨水等で流入し拡散したものとみられるもので、南半分区域にはわずかながら小土器片などを含有していた。

第５・５′層：シルト質壌土に細礫を含むもの～中礫を多く含み礫層状のもので、灰オリーブ色を呈し、いずれの礫も亜角礫である。これらは北端付近で顕著であるが、以南は中央付近まで続く第６層（細砂礫層）との界は不明瞭であり本来同層準とみられる。

第６層：細礫と砂から成る細礫質土で、灰オリーブ色を呈している。粒度からみると細砂以下は極く少なく、水の淘汰を受けている。第５層から連続し厚さが薄くなりながら北から12m位置あたりまで存在する。

第７層：北から10～12mあたりの断面レンズ状の薄いもので、礫の多い汚泥状腐植土であり、黒褐色で樹木の根や枝とみられる腐朽植物を含んでいる。この分布はほぼ東西方向に帯状をなし、基盤層である第９層の先端部上に堆積している。

第８・８′層：基盤土である第９層を抉ってその後に堆積したとみられる横断方向に帯状の部分的な土層で、シルト質で、灰オリーブ～オリーブ黄色を呈している。層中に混入物はみられないが、この上面には土器片や木製品等の遺物が散布している。

第９層：局部的に角礫を含む灰白色の粘質土である。粒度からみると砂は極く少なく、ほとんどがシルト～粘土である。流水による淘汰は受けていない土層のようである。南端に高く、距離10m中央部では約1.1mもの落差となる斜面をなして消滅する。この土層表面には土器片等の遺物が多数散布していた。

第10層：厚さ10cm～それ以上の黒褐色腐植質土層で、遺物散布の基盤土である第９層の下にあり、南は区域外からほとんど水平に調査区中央あたりまで認められる。

しかし、この土層は中央近く北から12m点付近で上下方向約10cmの縦ずれが生じている。この土層の末端は約２mで不明瞭になりながら消滅している。遺物等は認められない。

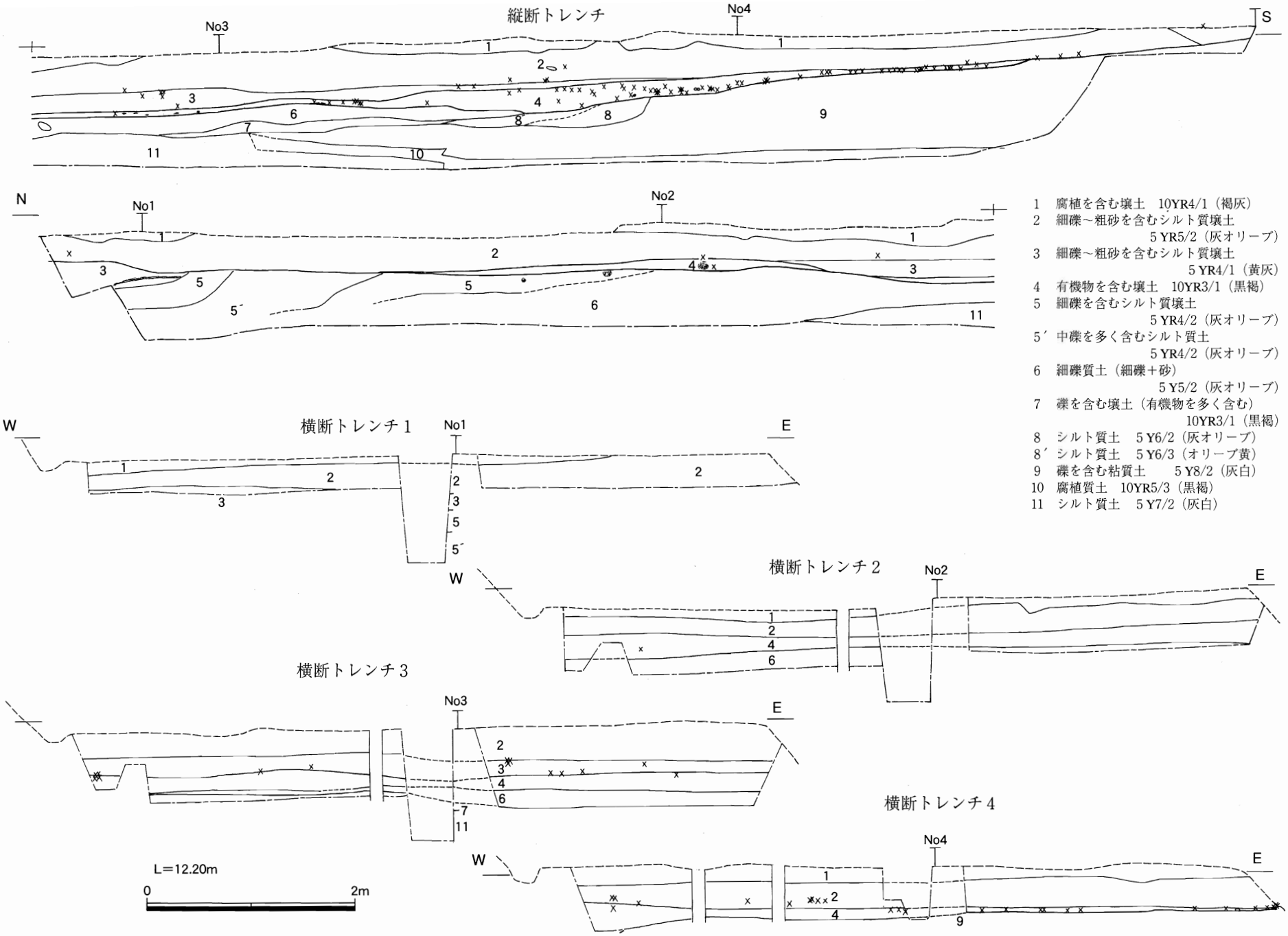
第11層：上記の暗色腐植土の下から、第６層砂礫層の下へかけて中央部付近に見られ、さらにトレンチ底以下へ続くもので、灰白色のシルト～粘質土である。これにも遺物等は認められない。なお、調査の深さは無遺物であることを確認してこれまでに止めた。

以上の観察結果からこの地点の土層序の成立を次のように判断した。

下方からまず水平に近い灰白色粘質土（第11層）のベースの上に、植生の薄い黒褐色土（第10層）があったが、地変かと思われる上方へのずれが見られ、その後南方高位置から灰白色粘質土（第９層）の崩積がある。そして北半分域はこのあたりを河岸とする緩やかな流れの河道となり、水際とみられる浸蝕とその後の堆積土（第８・８′層）あたりまで及んでいる。河道内は先ず流れの速い時があって礫土が堆積（第６層）し流れは弱まる。これは流路が変わって後背湿地状態になったのであろう。

まもなく例えば集中する降雨などにより、南山手に起因するとみられる遺物（時代幅のあるもの）が流れ出して拡散し、その暗色土層（第４層）は河道域にまで達した。

その後は極く緩慢な流れのよどみ状が永く続き、微砂質土の堆積（第２層）が厚く発達した。そしてこの面には葦が群生していた。この状況は永い期間にわたって河川の後背湿地の様相であったことを示すものといえよう。



1　腐植を含む壌土　10YR4/1（褐灰）
2　細礫～粗砂を含むシルト質壌土
5 YR5/2（灰オリーブ）
3　細礫～粗砂を含むシルト質壌土
5 YR4/1（黄灰）
4　有機物を含む壌土　10YR3/1（黒褐）
5　細礫を含むシルト質壌土
5 YR4/2（灰オリーブ）
5′ 中礫を多く含むシルト質土
5 YR4/2（灰オリーブ）
6　細礫質土（細礫＋砂）
5 Y5/2（灰オリーブ）
7　礫を含む壌土（有機物を多く含む）
10YR3/1（黒褐）
8　シルト質土　5 Y6/2（灰オリーブ）
8′ シルト質土　5 Y6/3（オリーブ黄）
9　礫を含む粘質土　5 Y8/2（灰白）
10　腐植質土　10YR5/3（黒褐）
11　シルト質土　5 Y7/2（灰白）

図3　土　層　図

V　遺物の検出状況とその基盤

検出した遺物は単純に１層のみで、ほぼ中央部（３C杭）付近から南であり、北に向かって傾斜する灰白色粘質土層の上面と、それから流下した黒褐色粘質土（第４層）中に散布していた（図４）。

土器片はほとんど細片に近いもので、採取後接合し得るものは稀であった。

またこれら土器片は弥生前期から古墳時代前期までのものが主であり、古墳時代後～末期に属するもの若干が含まれている。しかし、各時代ごとの分布区分はなく混合状況であった。

遺物の散布状況は遺物包含層である黒褐色粘質土（第４層）の厚さに準じており、南端の最高所である標高11.80m以上部分にはほとんど見当たらず、灰オリーブ色シルト質壌土が被っていた。

以下レベル30cm低いほぼ中央杭付近までほぼ一様に散布し、また中央杭（３C）付近でより低レベル部には木製品や自然木などがやや集積状に散布した。この木質遺物の散布は大まかに東西方向に帯状となり、微細地形から後背湿地の水際ライン（標高11.50mあたり）とみられる分布である。

これら遺物散布の基盤である第４層の表面についてみると、局部の等高線はわずかに波うちながら東南東から西北西へと描かれ、水際推定線や木質遺物の分布も同様となる。この地勢線は大地形図上からみても同様であり、南講武連坦地の南際水裾ラインに一致する。

このようにみるとき、遺物散布の基盤面となった灰白色粘質土層は南山麓部からの崩積によるもので、その最先端部の水際部にあたると理解される。

また散布する遺物は該地に直近のより高位置、例えば現道路～宅地部あたりに元位置を求めることができよう。

出土遺物集計表

調査区	弥生～土師系土器				須恵器	石製品	木器類	核果類	その他	計
	弥生前～中期	弥生後～古墳中期	古墳後期	区分不明						
縦断トレンチ	31	32	4	13	1	2	3	－	－	86
１区（０区含）	8	15	1	12	8	1				45
２区	19	35	4	19		4	7	19		107
３区	340	219	13	247	3	7	39	5	1	874
４区（５区含）	265	372	60	408	11	14	2	3	1	1136
上層堆積土中				3	1					4
計	663	673	82	702	24	28	51	27	2	2252

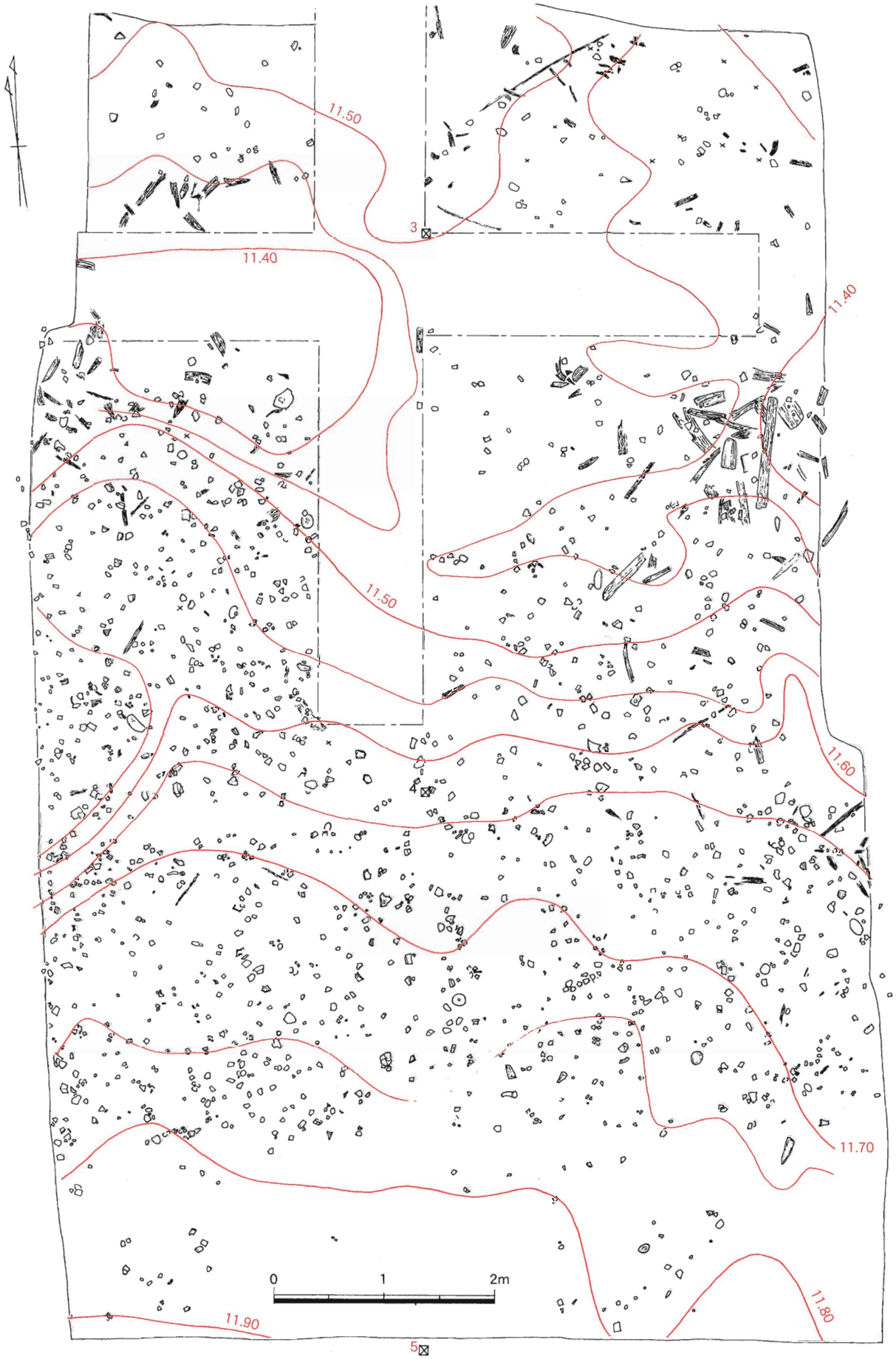


図4　遺物散布状況

Ⅵ 遺　　物

1 土器

土器はすべて細片であり、ほとんどが単一の包含層に混入・散布していた。採取総数は2,100片余である。このうち図化できたのは252点であり、弥生時代前期以降古墳時代後期に至る各時期のものがみられる。

以下出雲地域の様式編年[註2]に準拠して区分し、器種別にその概要を記す。

A 甕・壺類

弥生Ⅰ様式（図５）

１・２は広口壺の口頸部で、頸部下に界線を１条巡らせるが段差は不明瞭である。１は頸部をハケ原体で押圧し、２は全面ハケ目で短かく外反する口縁は端部を丸くナデる。３はやや強く外反する口縁の端部外縁に浅くヘラ刻目を施す。胎土は１・２が長石・石英砂を含み黄褐～黄灰色を呈するが、３の胎土にはさらに桃色砂粒（斜長石か）が加わりにぶい褐色である。

４は頸部に界線を巡らせ幾分段差をつけ、粗くナデている。口縁の外反はやや緩い。５・６は胎土に粗砂粒を含む同期とみられる胴部で、ハケ目原体による羽状文が巡る。６は頸部に近く、５は胴最大径位置である。

７・８はほぼ同趣の広口壺口縁で、口縁端が１は下端、２は上端に浅い刻目を施す。７は内外ともナデ、８は内ナデ外ミガキである。９は小形壺の口縁で、口縁は短く緩く外反し、頸部外面に指頭押圧痕がみられる。内外ナデのようである。これらはいずれも長石砂を含む胎土で、７は橙色８・９は黒褐色を呈する。また６には内面に炭化物の付着が認められる。

１～６はⅠ－２様式、７～９はⅠ－３様式に相当する前期の土器である。

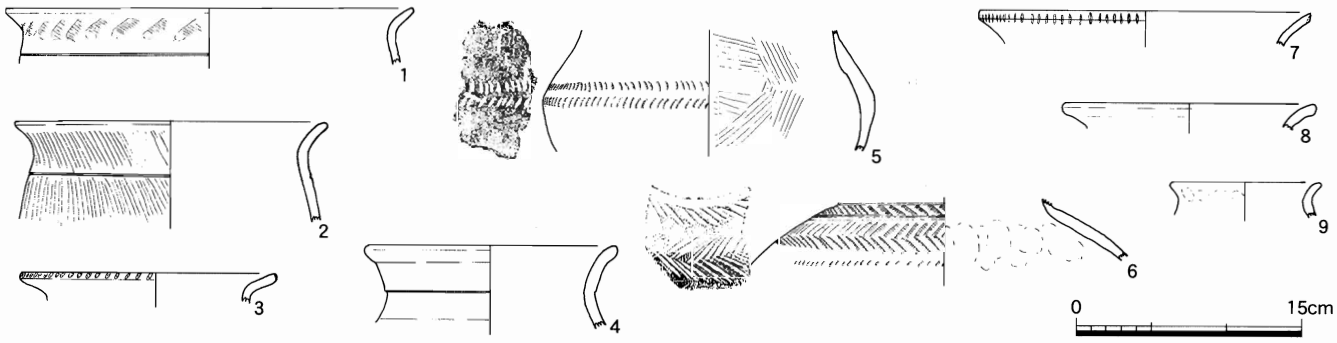


図５　遺　物　図　（１）

弥生Ⅲ様式（図６）

10～15は口縁部が大きく朝顔状に開くもので、10はさらに上方へ直角に貼付け立ち上りを付けたもので、いずれも外周と上面を加飾している。

10は上端に刻目、外周に単純鋸歯文をヘラで描き、内外面ともに放射状のハケ目がみられる。11は口縁端を若干上下に引き出し、外周上4か所にボタン状の粘土貼り付けを加え、この面には細かい刺突を行って蓮の実状としている。また上面には浅くヘラで羽状の刻文を巡らせる。

12・13は口縁端を下方に肥厚させ、上面に粘土帯を貼り付けて粗い刻目を施す。外側面は緩く凹線状にナデている。14は外側面は破損していて不明であるが、上面小さいボタン状の貼付浮文がみられる。破片が小さいため間隔や個数は不明。内面には粗いハケ目がみられる。15は口縁端を下に肥厚させて、ほぼ垂直な側面に4条単位の鋸歯文を巡らせ、上端には細かく刻目を加える。

これらはいずれも胎土の砂粒は細かく少なく密であり、灰黄～オリーブ灰色を呈し、入念なナデ又はミガキである。

16はラッパ状に開く壺の口縁部で、口唇を肥厚させ、側面は内傾する。この側面は強くナデ下端の尖り部に刻目を加えている。胎土に細砂を含み、灰黄褐色で外面はミガキである。

17～19は甕形の口縁部で、肥厚した口縁端を上に尖らせ外面は内傾する。17・18は薄手造りのく字状に強く屈曲する口縁で、頸部には貼付帯を巻き大きく刻目を加え、口縁内面はミガキである。18の胴部にはハケ目が残るがナデているようだ。19はやや緩く屈曲するやや小形で厚手の口縁で、やはり肥厚した口唇を上に尖らせている。内外ナデて加飾はみられない。これらの胎土には細砂を含み、灰黄～灰黄褐色を呈している。

以上のように大きく開く朝顔形の口縁に装飾したものや、頸部に刻目突帯を巡らす一群などは、中期中葉のⅢ－1やⅢ－2様式に比定される。

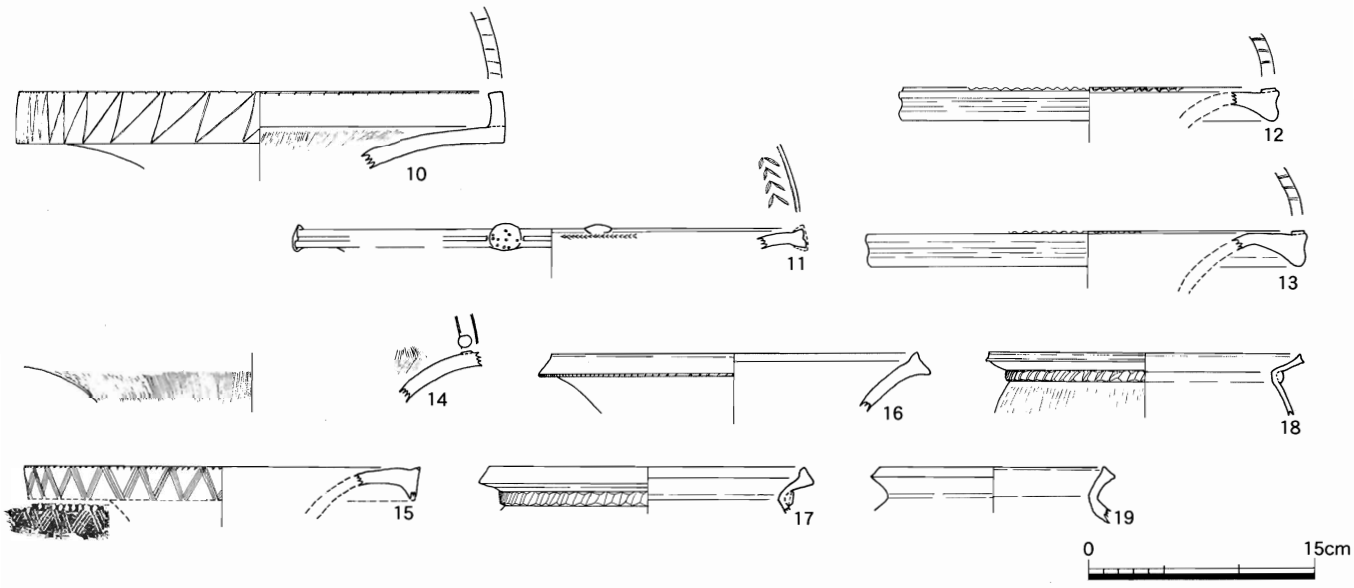


図6　遺　物　図　（2）

弥生Ⅳ様式（図７・８）

20はやや大壺の口縁で、緩く外反して外上方に尖らせ、外傾気味の口端面に浅い擬凹線２条を巡らせ、その上端に刻目を施す。21・22は小形壺の口縁で、21は強く短く屈曲した口端はくり上げ様に上に尖らす。この側面と頸部にやや細い凹線を巡らせる。22は肥厚した口端を横に強く張り上端も短く尖らせ、内傾の強い口帯面にはややあまい凹線３条を巡らす。胎土には砂が少なくち密である。

甕の口縁についてみると、23・24は短く強く屈曲した口端部を横と上方にくり出して口帯とし、あまい凹線３条を巡らせ、23はその後に斜行する刻線を加える。

小形品を含む25・27・28は、口端を上方に短く折り返して直立させた手法で、同様にあまい擬凹線を２～３条巡らす。26は端部の折り返しが短いが同趣である。

29～31は小形品で、口端をやや肥厚させ狭い口帯に条線のもの30・31と、ナデたままの無文のもの29がある。また32はこれの口径の大きいものである。

33～37もほぼ同様であるが、口端の横張り出しは強くなくむしろ上方へのくり上げがやや強くなったもので、口帯は内傾しても直立に近くなり、幅もやや広くなる。ここに擬凹線～条線２～３条を巡らすもの33・35～37と、強く押しなでしたもの34がある。

また胴部についてみると、33は内外ともナデであるが、34・37は外面はタテハケ内面はケズリである。なお37は胴最大径あたりにヘラ状のものによる横ハ字状文を刻んでいる。

38は短く外反する口縁はあまり肥厚せず、口帯ともナデである。胴部に列点文を巡らせ、胴内面はケズリである。

これらは内傾する口帯に擬凹線を施す一群で、ナデ調整であり、胴内面にケズリがみられる。また胎土は、小形品22・27～31は概ねち密で微細砂を少し含むが、他は細砂を含むものが多く、灰黄～灰黄褐色を呈し、外面にススの付着する33・34・37・38もある。これらはⅣ－１様式に当てられよう。

39～45は肥厚した口縁部の横突出部は若干下方へ小さく尖り気味となり、むしろ上方の突出がせり上がって上方に伸びるようになったもので、側面の口帯も内傾から直立気味となり、口帯には擬凹線

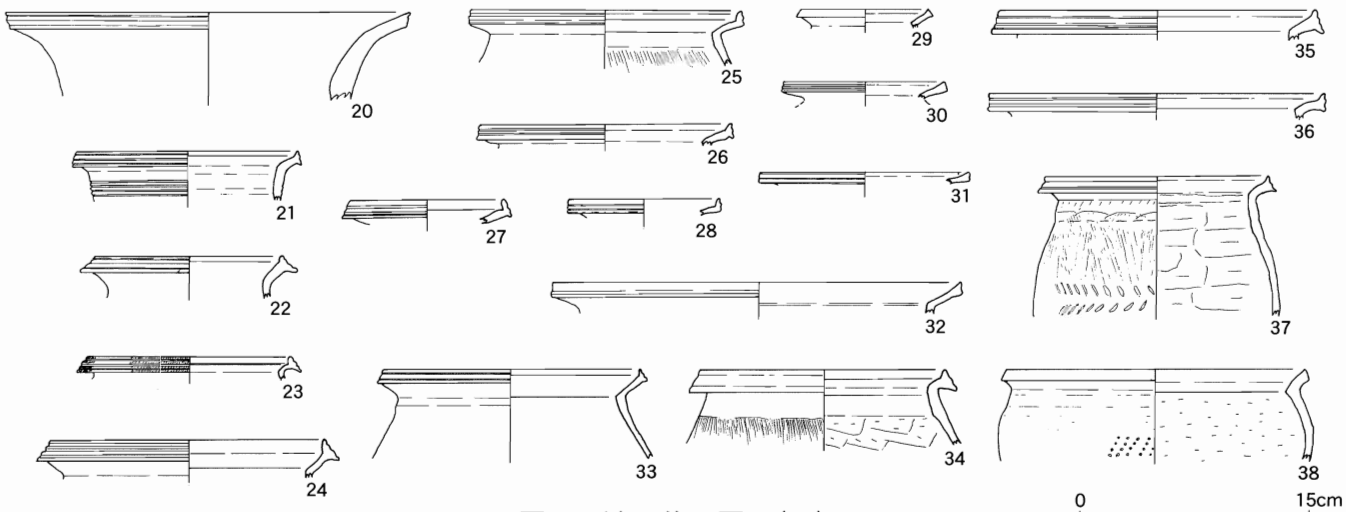


図７　遺　物　図　（３）

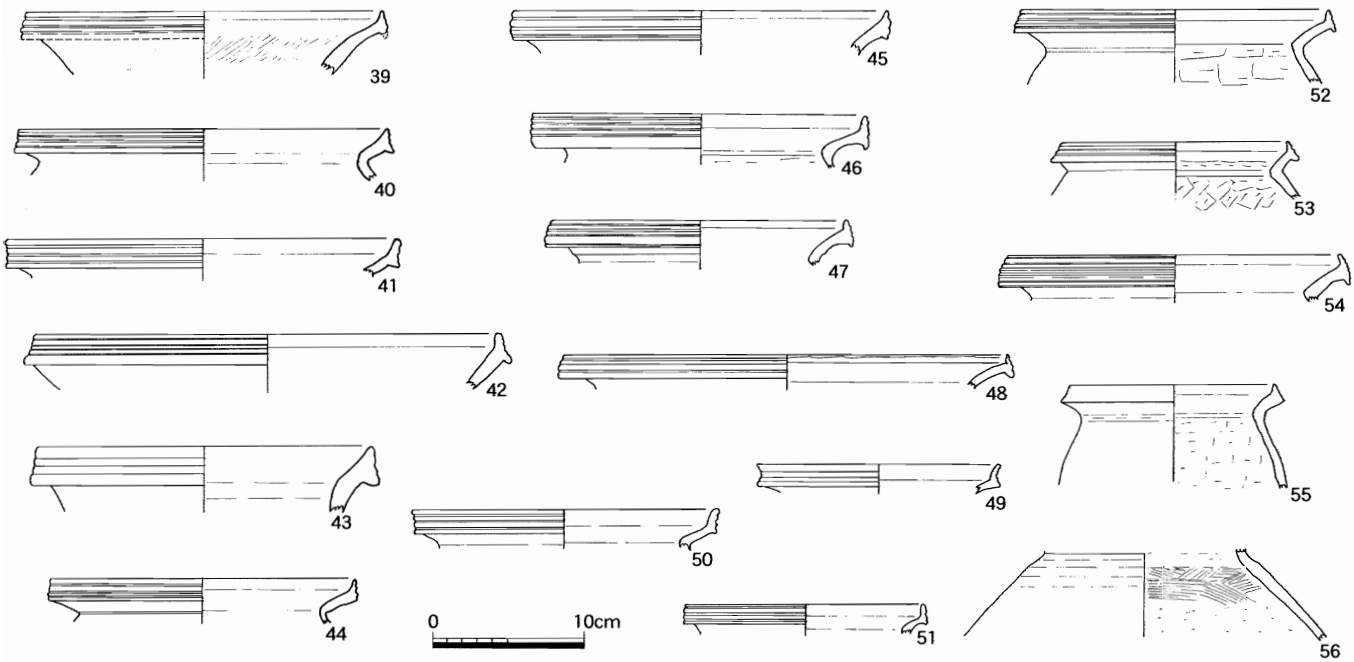


図8　遺　物　図　（4）

～条線３～４条を巡らせる。

46～54は口縁端を折り曲げ又は引き上げてやや拡張し、内面にアクセントをつくり、短いが立ち上る一群である。直立に近い口帯はやや幅を増し、そこに概ね４条の条線を巡らせる。43のみは３条の凹線をナデ消している。

55もほぼ同様であるが、口縁下面端は下に尖らず、口帯はナデのままで条線はない。

胴部の判るもの（52・53・55・56）は少ないが、56の頸部内面にハケ目の残るものの他は、内面すべてケズリであり、外面はナデである。またこれら甕体の外面にはススの付着するものが多い。

このように39～56の一群は、主に口縁部の拡張傾向を示すもので、Ⅳ－２様式に相当し、中期後末期にあたる。

弥生Ⅴ様式（図９・10・11）

57・58は前段階の様相を残すものであるが、やや内傾する口帯は幅がやや広くなり、擬凹線が鈍く57は６条と多くなっている。59～63は口縁端が上へ尖り気味の複合口縁となり、側面はほとんど直立し、その幅1.5～1.7cm の直線的な面に３～５条の原体による擬凹線を巡らせる。但し61は浅く６条の沈線である。これらの内面は頸部下すべてケズリで、外面については胴上部の残る63でみると、肩部以下はハケ目でそれより上はナデである。

64～66についても同様であるが、直立する口帯の幅はやや広く、口帯下端には頸部からの面と段差をつけて下方への突出がみられる。口帯の線文は４～３条であるが、64は擦痕状で浅く不明。65は底尖りの細線、66は浅い丸底の３条線文である。なおこれらの口縁内側のアクセントはやや不明瞭で、緩いＳ字形である。

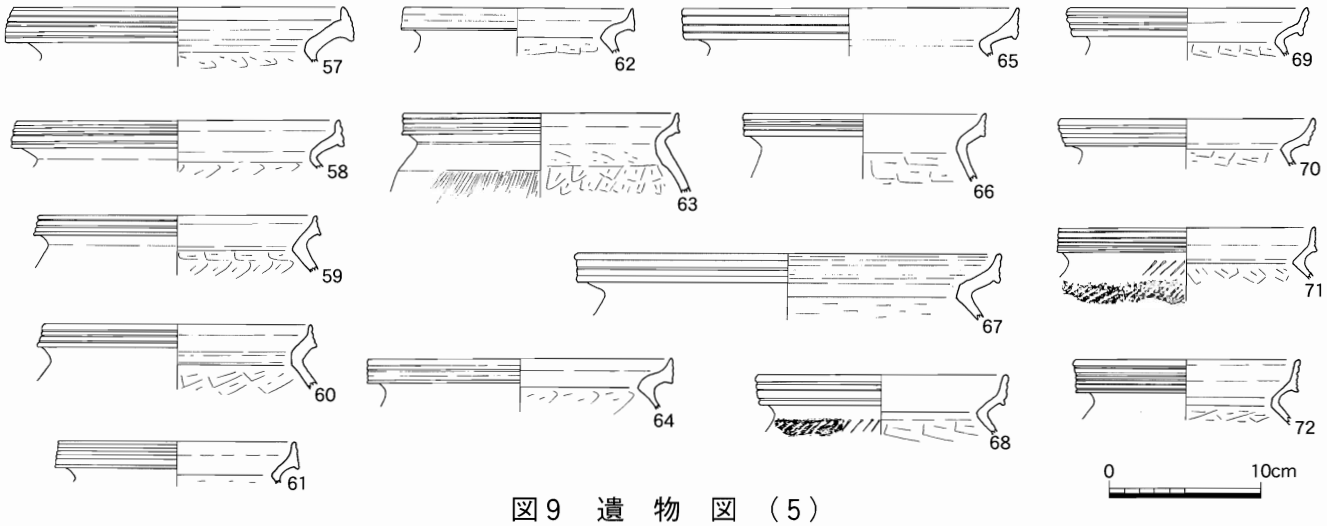


図9　遺　物　図　（5）

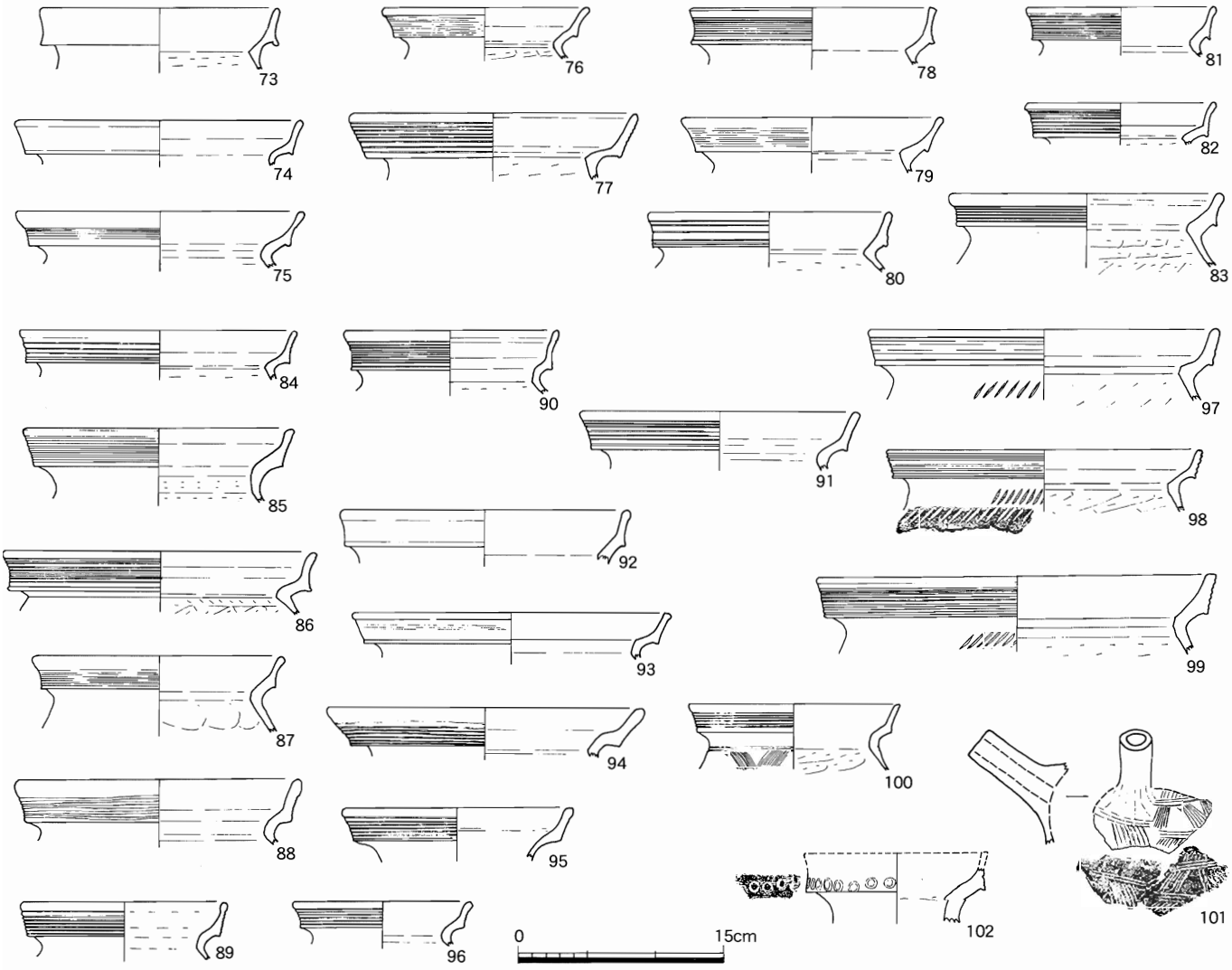


図10　遺　物　図　（6）

67～72は明らかなアクセントをもって複合口縁が立ち上がるもので、幅約２cmの口帯下端は下垂～斜め下方に突出し、上端はナデて丸味となる。口帯には擬凹線３～５条を巡らす。このとき線施文の原体によるとみられる口帯の外反り（67・71・72）もみられる。また頸部直下にはヘラ状工具によるとみられる連続ノ字文が施されているもの68・71がある。

これらの甕は口径20cm前後で、ススの付着するものが多く煮焚用であったとみられる。

このように57～72については、概ね胎土に若干の微細砂を含むち密なもので、複合口縁の発達と凹線文を特徴とし、明確な区分はなし難いが、弥生後期前半のⅤ－１～Ⅴ－２様式に相当し、草田遺跡１～２期にあたる。

73～83は上記に続く形で、口帯下端にわずかに下～斜め下方への小突出がみられるが、口帯は外反しているものである。口帯の施文についてみると、73はナデのままで無施文、74～76・79は木端状原体を口帯の下半に主点をおいて押しナデていて明瞭な線文とはならない。77・78・81～83はクシによる多条線を巡らせる。80は木端状原体によるのか間隔不同の小凸線状となっている。そしてこれらはいずれも口帯が線文部を中心に反りをもって外反しており、施文用具の形状を思わせる。

84～96も同様の複合口縁であるが、口帯がより外反して幅広となり、口帯上端を厚くして丸く整える一群で、下端の突出は横方向又はナデ上げ状である。口帯の線文は多条化してクシのほか貝腹縁によるとみられるものが主であるが、木端状工具による押圧擦過とみられる87・88・92・93もある。

97～100は頸～肩部に施文がある。97～99は頸部にノ字状ヘラ押し施文を巡らせ、100はシャープな細線で薄造り口帯に６条を、頸部下には２条の区画線をまわして肩部に施文帯をつくる。肩部の施文はシャープな極細い多条線の弧状をモチーフに、向きを交互に１周させるもので[註3]、口径15cmの小形品である。

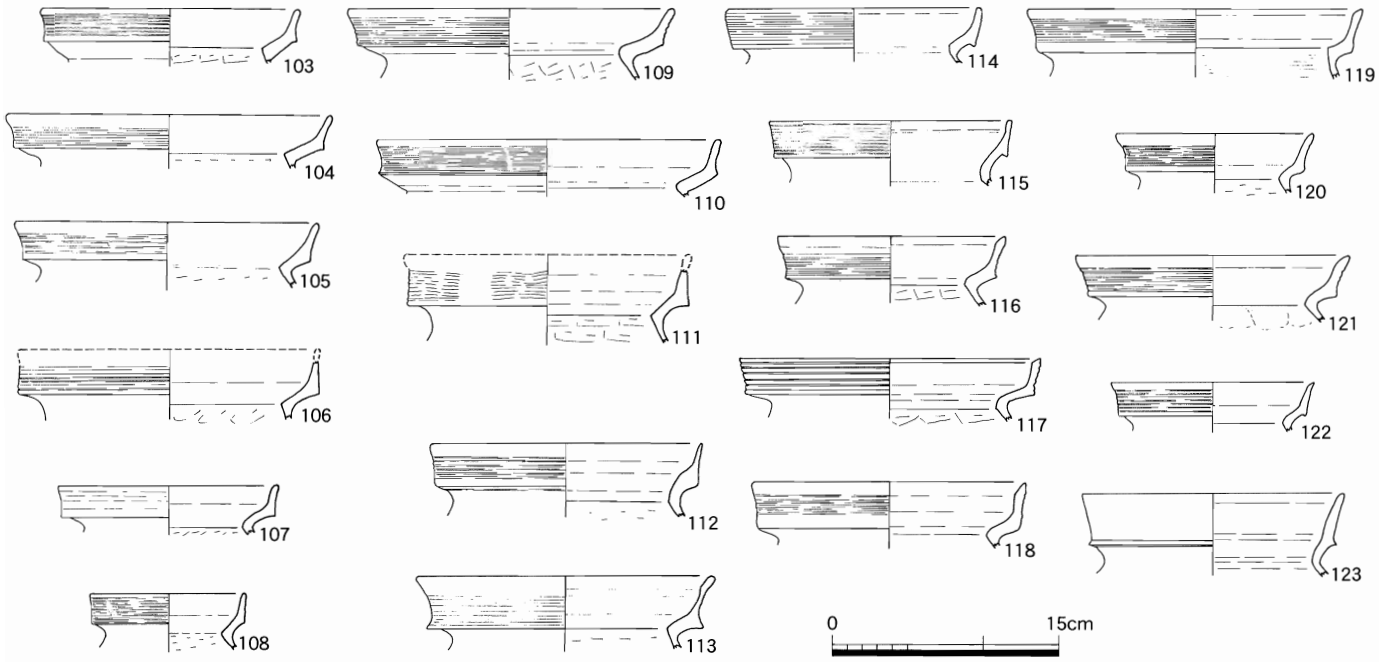


図11

101は注口土器である。注口は孔内長で6.8cm、孔径1.1cmの円筒形で、約35°上向きに付けられている。そして胴部には上下を3条の細線で区画して、100の場合のような多条弧状線のモチーフで少なくとも3段以上でにぎにぎしく施文されている。施文原体は細いヘラと思われ、条間隔に不揃いがある。全器形は判らないが壺形[註4]が想像される。

102は大形壺の口頸部で、複合口縁の上端を欠くが下端に近く口帯に単円スタンプ（竹管によるもの）を巡らせている。

以上73～102では胎土に細砂を幾分含むものが多いが、中～細砂の多いもの78～80・86・87・92・94・96・101もある。また外面にススの付着するものも多い。この一群は複合口縁の外反する口縁上端を厚く丸味とし、下端はやや尖る。また口帯には多条線文を、主に肩部あたりにノ字や弧状線で飾るなどが指摘され、Ⅴ－3・草田遺跡3期に相当しよう。

103～111は上記にほぼ同じであるが、口帯は開くもののその幅がやや小さくなり、下端は横又は斜め上方に尖らせ、上端は漸次薄くして丸味とするものである。口帯の条線は浅く細密で、ほとんど木端の横ナデ条（107・111）もある。

112～115は口帯上端が先細りに薄くなるほかは上に同じである。

116～123は口帯上端を丸味でなく外方へ尖らせるもので、線文も口帯幅いっぱいに施すものと、上下に余白を残して中寄りに施す118～121があり、全く施文しない123もある。もっともこれらの条線は弱くかすれることが多く、不鮮明のものが多い。まだ口帯下端の尖りが鈍くなり丸味となる118～121がある。これらの口縁は内外ナデているが、胴内面はケズリである。頸部以下については不明であるが、外面にススの付着するものが多く煮焚用の甕である。

胎土は概ね細砂を少し含みち密であるが、特に103～105・109・113・118・119の場合その細砂はすべて角ばらず浜砂のように丸味～球状のものであり、ある限られた地域での製作を示すものといえよう。

以上についてはその諸相から弥生末期であるⅤ－4様式、草田遺跡4～5期の一群といえよう。

古墳時代前半期（図12）

124～128は複合口縁の口帯部がやや幅を減じ、127のほかは擦過状の条線痕を残すもので、口帯下端の尖りはあまく斜め上方へくり上げとなるものである。このうち127は口縁上端部が外方へ折れる点で他と異なる。129～131はやや小形で、口帯下端の尖りは弱くなり、狭くなった口帯面には反りがなく、口縁上端を平坦にナデるものである。

132～134は単純に開く口縁に近いが中途でアクセントをもって屈折して、外面中間には鈍い稜状をなし、複合口縁形の終末を示している。口縁端は平坦にナデる。

これらの一群は複合口縁の終末期であり、草田遺跡7期とそれに続く時期ととらえられ、小谷土壙墓資料や一部は大東高校のグランド遺跡等に類例がみられて、古墳時代前期に比定される。

135～147は甕の単純に開く口縁部分である。高さ3㎝前後の単純口縁は内反りの135・139もあるが

概ね直線的～やや外反気味が主である。立ち上る口縁中半を若干厚くするものが多く、外面に稜状のアクセントをつける135～138・144は複合口縁の名残りとみられる。口縁端は平坦にし、その頂面を浅い凹線状にする146・147もある。また147は口縁部を頸部で接合した痕跡が認められた。

これらは胎土に細砂も少なくち密で、口縁内外はナデ、胴部外面はタテハケ内面はケズリで、器壁は概ね均一になっている。

148・149は壺の口縁とみられる。直立に近い単純口縁状ではあるものの、口縁外面の中間に稜をつくり複合口縁の名残りをとどめている。

以上の単口縁の甕壺は、概ね古墳時代中期頃で須恵Ⅰ期にかかる時期の所産[註5]とみられ、大東高校グランド遺跡[註6]等に共通するものが多い。

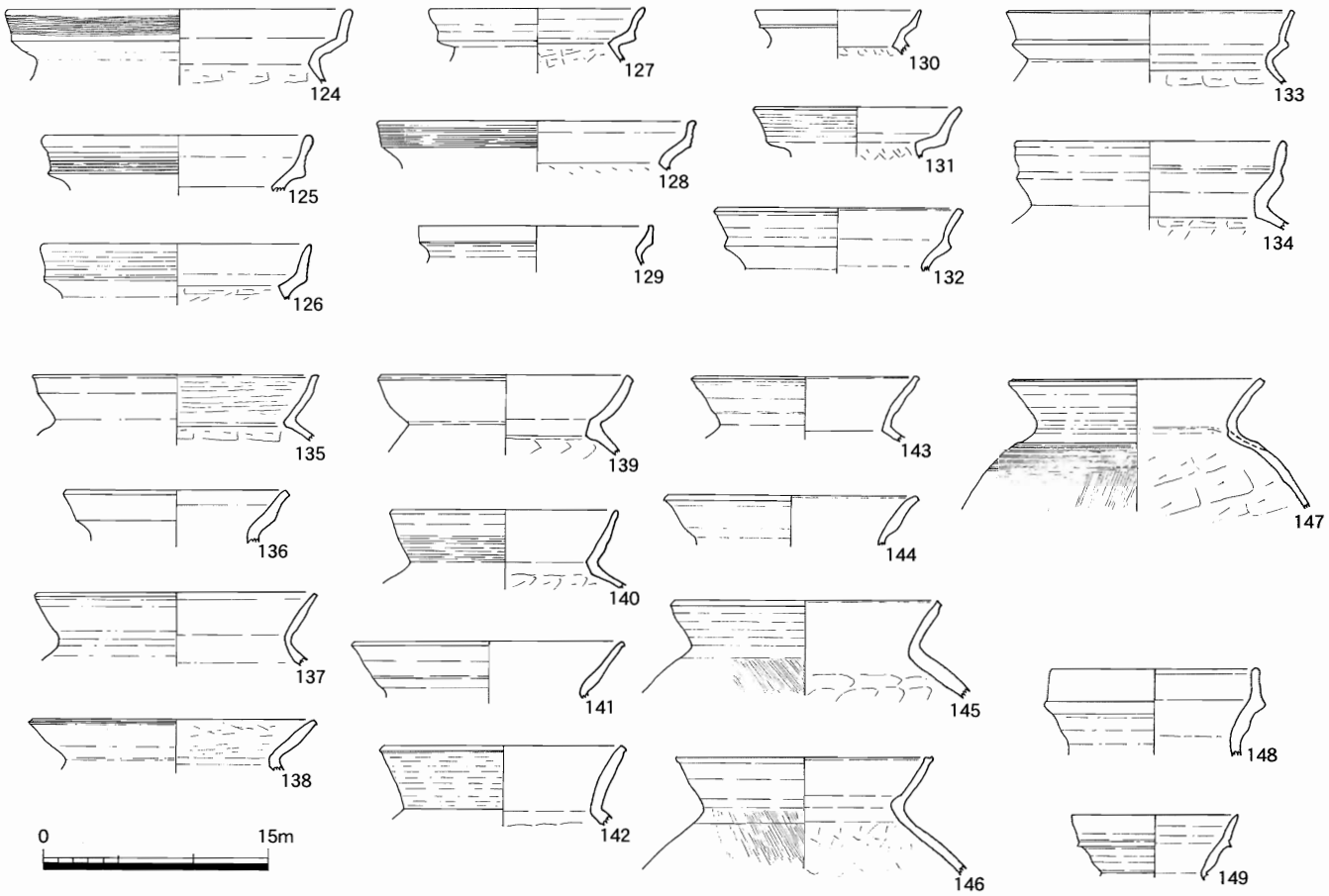


図12　遺　物　図　（8）

肩部施文片

150～176は甕体肩部と思われる施文の部分である。

150・151・153は櫛状工具の刺突を密にした列点文帯を巡らすもので、151は頸部直下から肩部へ2段に行っている。152は間隔をおいてノ字文帯としている。これらは概してち密な胎土で、器表面はタテハケ（150・151）とヨコナデ（152）ミガキ（153）で、内側はすべてナデである。調整と施文の様

相から弥生中期半ばのⅢ－２様式にあたると思われる。

154～164は工具の押圧やヘラ状具によるノ字状の施文である。154～160は表面ナデ、154・157・158・160はミガキ、161・163はハケ目であるが内面はすべてケズリで、薄手造りが多く、施文は単列と複列がある。施工具に貝腹縁を用いた156・159・164、ヘラ先で描いたシャープな斜線の158・161もみられる。

165は内面ケズリ、外面タテハケ目の肩部に粗い櫛状工具を引きずり気味に押圧したもの、166～169はナデ（166・167）又はハケ目（168・169）の器面に線描のみられるもので、168は太く、他は細く、先丸の棒状のもので描いている。単なる界線であるのか判らないが、168は絵画的なものである可能性もある。

以上の16点は弥生後期前半Ⅴ－１～Ⅴ－２期にほぼ相当するものであろう。

170・171は同一個体のようである。１条の横線によって区画された施文帯に、少なくとも３段のノ字状押圧文を連続させ、９～10本を単位に次は逆ノ字の連続を交互に施す。小形の甕とみられ、外面にススが著しい。172も同様のモチーフであるが、区画横線が２～３条でノ字文も弧状となり、３条単位のクシ歯状用具でシャープに描いたものである。これは前出した100・101と同趣で、100とは同個体であるのかもしれない。

173はやや粗いクシ条線で羽状に施文したもの。器内面がナデてあることからも少し古くみることもできる。

174は肩の強く張る小形品で小壺であるかもしれない。施文はナデた肩部にＳ字を連続させた形の押し文を１段密に巡らせるもので、施文原体は波状の縁をもつ貝の破片であろうか。

175は特殊なスタンプ文土器で、小形壺の肩部と思われる。頸部下際から２条単位の浅く鈍い横線で区画した施文帯が少なくとも４段は認められる。各施文帯には上から巴文、く字文、巴文、逆く字文でそれぞれ高さ5.5㎜ほどのスタンプである。このスタンプ文様は事例が稀で、管見の限りでは巴文は

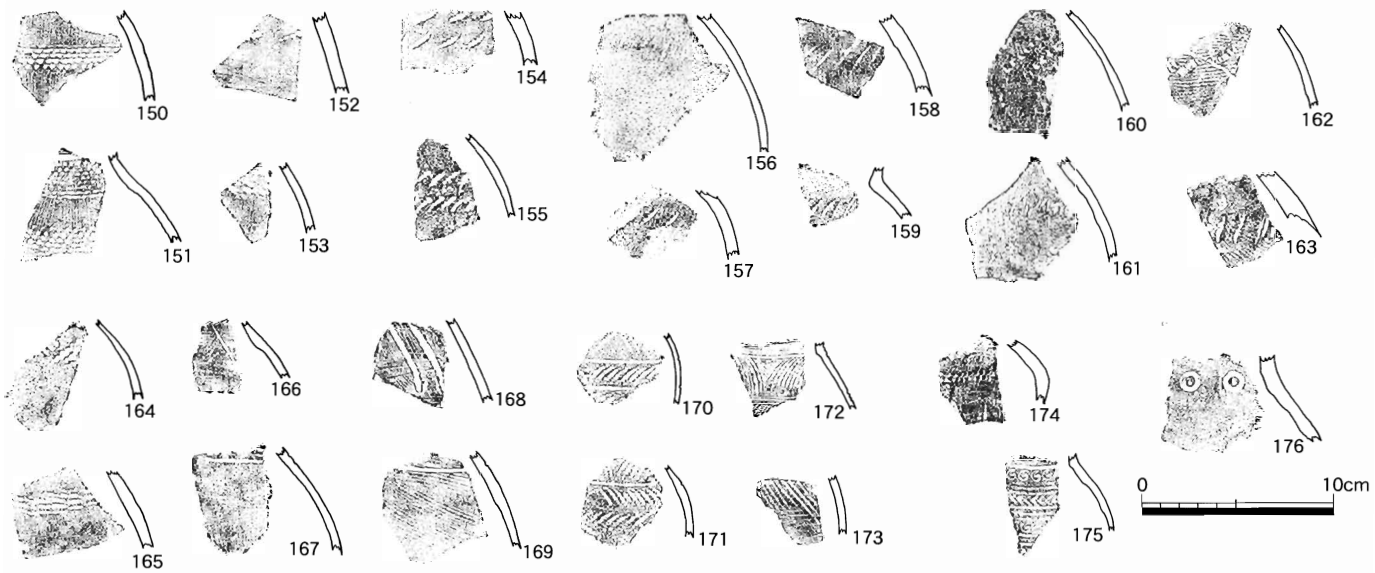


図13　遺　物　図　（９）

加茂町正面北古墳群10号墳の特殊小形壺[註7]のみであり、く字状の文様は初見である。

176は102の壺の肩部とみられる破片であり、同様に単円スタンプ文がある。しかし102のスタンプ円文より0.5㎜ほど大きく、施文原体は別のもののようである。

154～169の施文土器は概ね後期半ば頃の甕体を飾るものであり、170～176のさらに繊細な文様やスタンプ文はこれに続く、後期後半のⅤ－３～４様式にあたる。

平底底部（図14）

壺～甕と思われるものの底部について概観する。

177はほぼ直線的に集約して広い平底となるものである。胎土は粗砂が多く特徴的で、底縁は指圧しながらヨコナデしてわずかにアクセントがみられる。内外面ともタテに強くナデ下ろし、底面はラフになでている。178もほぼ同様で、底縁はやや強く指圧してアクセントがつく。179・180は胴下部は下から上へタテハケ目で、179は底縁は強く指圧してヨコナデ、180は厚手で不随意なタテハケ目が底縁までみられる。いずれも底面は粗略なナデ、内面は肌が荒れて調整は不明である。以上の４点はその手法から概ね前期の所産とみられる。

181～185は胴下部が強くすぼまりアクセントをもってしっかりした平底をつくるもので、外面はタテミガキ（183～185）や入念なナデ、内面にはケズリ（184・185）と指頭ケズリ（182・185）で、181は肌荒れのため不明。いずれも底縁は強くヨコナデで、底縁端はシャープであり底面はナデて正しく平坦である。これらは大まかに弥生中期土器のものとみてよかろう。

186～189は強くすぼまって若干凹底となるもので、外面はハケのちナデ（186・189）、ミガキ（188）、入念なナデ（187）であり、凹底面はいずれもナデていて、内面はケズリである。190～192は底尖りが弱く直線的に底縁に至るもので、外面ミガキ、内面ケズリで、内底面は丸くなる。193は丸味をもって底縁に至るもので内底面は丸くなる。これらは底面が漸次小さくなる一群であり、後期に属するものである。

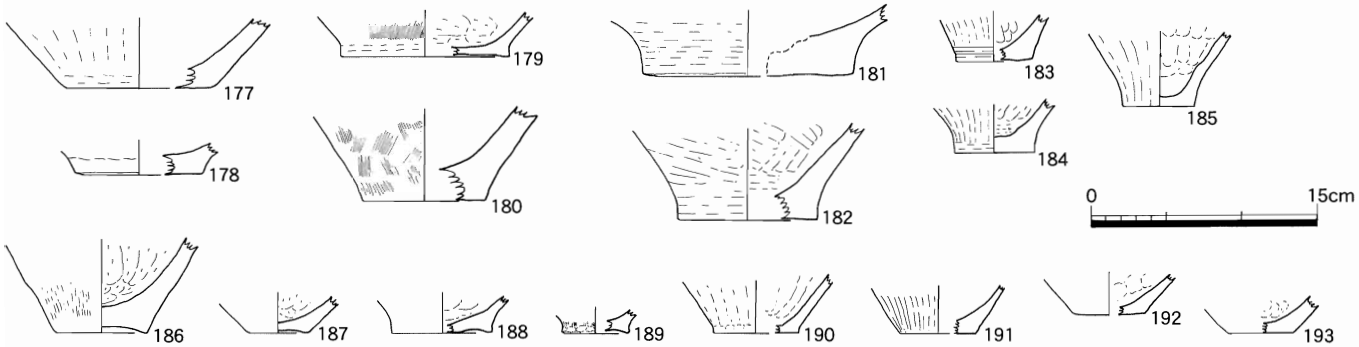


図14　遺　物　図　（10）

小形丸底壺・他（図15）

194～201は小形丸底壺である。

細砂を少し含む胎土で、口縁は単純に直線的に開く。外面ハケ目やそれをナデ消したもの（194・195・199・200）が多く、入念にナデた196～198もある。胴部内面は指頭削りで粗なものが多い。弥生終末期のⅤ－4様式に伴うものであろう。

202～204は蓋形土器とみられるもので、202・204は細砂を多く含み、外側面にハケ目が認められ、頂面は203もともにナデ、202・204の内面はケズリである。しかし203は坏脚であることも考えられる。この蓋形土器はハケのちナデや内面ケズリの手法からすると、弥生後期後半頃ではなかろうか。

その他205は短頸壺で、胎土にはかなり粗い砂を含む。口縁はナデているが胴内はケズリ、外面は粗いミガキで赤色に塗っている。特殊用途を思わせる壺である。様式年代は後～末期であろうか。

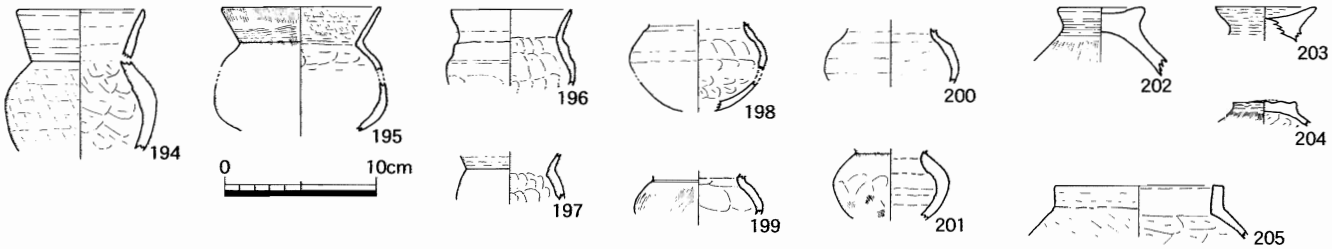


図15　遺　物　図　（11）

B　鼓形器台（図16）

図示した器台はすべて複合口縁状の鼓形器台である。これらの胎土はすべて細砂を含むが多少の差がある。

206～209は器台受部で、いずれも口端を欠く。幅広い口帯はすべてクシ多条線を巡らせ、下端は横又は斜め下方に尖らせる。内面はミガキ、外面口帯より下はミガキ（208）やナデ（206・207）であり、209は肌荒れで不明。

210～212は筒部で、210は3条2段の沈線を巡らすが、211・212は無文である。内面最狭部より上はミガキ、より下方はヘラ削りで、開脚部にかかるところから粗ナデがみられる。外面は上半ミガキ、下半はハケ目（211）と粗ミガキ（212）で、線文のある210はナデである。

213・214は筒部下の開脚するあたりで、内面はケズリ、外面はナデ（213）と細かい多条線文の下方をミガクもの（214）がある。

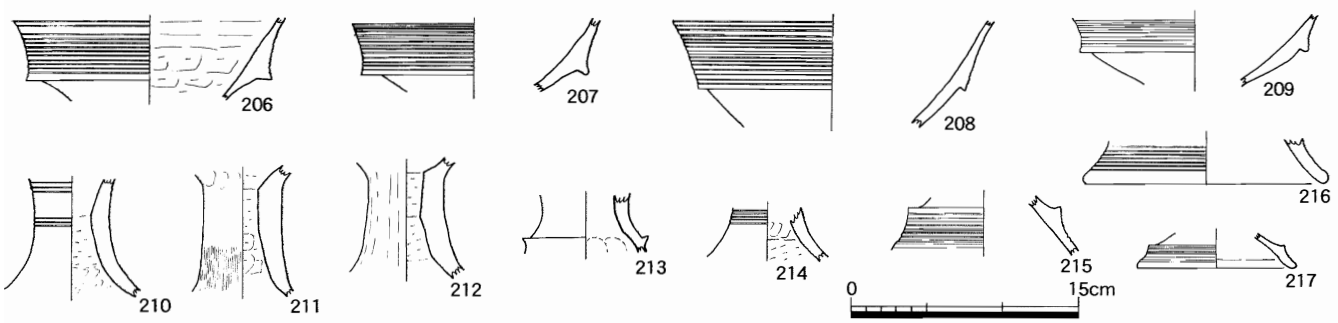


図16　遺　物　図　（12）

215～217は脚部で、215は脚端を欠くが、脚帯にはクシ多条線を描き、脚端は丸く収める（216・217）。脚帯上端は斜め上方に尖らせる。

これら各個の間に様式的な差異はほとんどなく、筒長が短縮する以前の器形であることから、大まかに弥生後期の半ばまでに考えられる。

C　高坏

218は胎土に細砂を含み灰黄色で、口縁は内湾気味の浅い坏部である。口縁上端面と外側面にしっかりした凹線を巡らす。坏内面はナデている。凹線文の盛行する弥生中期半ばのものである。

219は脚端部で端部はやや屈曲して厚く丸味とし、外面はタテミガキ、内面は削りである。屈曲部には櫛描３条線が間隔をおいて縦に磨き残して文様状にしている。220・221は単純に開く脚端でやや厚手である。220は内面ケズリのち部分的にヨコナデ、外面はナデで下端を内傾する平らな面としている。221もほぼ同じであるが、外面漆黒色に入念なミガキで、内面はケズリ、下端は丸く収めている。この３点は弥生中期後～末頃のものであろうか。

222～224は脚端に稜をつくり、屈折して立つ複合口縁状の脚帯をつくるもので、222は高さ３㎝近い脚帯にしっかりした太目の凹線４条を巡らし、内面はナデ。223・224は口帯が１.5cm前後で低いが、３条の凹線を引きそのあとを軽くナデている。内面はケズリで下端はナデている。この３点は弥生後期前半とみられる。

225～229は坏底と口縁を画する稜があり、口縁は強く外反する坏部である。口縁は坏底の端に接合して外反立ち上らせる手法で、ここに稜が付く。225は外底面はナデたのち放射状にハケ目で飾る。226の外底面は放射状に指圧しナデ、口縁部はハケのちナデのあと斜格子文状にヘラ暗文を描き、内面は放射状の暗文で飾る。227の底外面はナデ地に放射状のハケ目をつけ、口縁部はミガキである。内面の

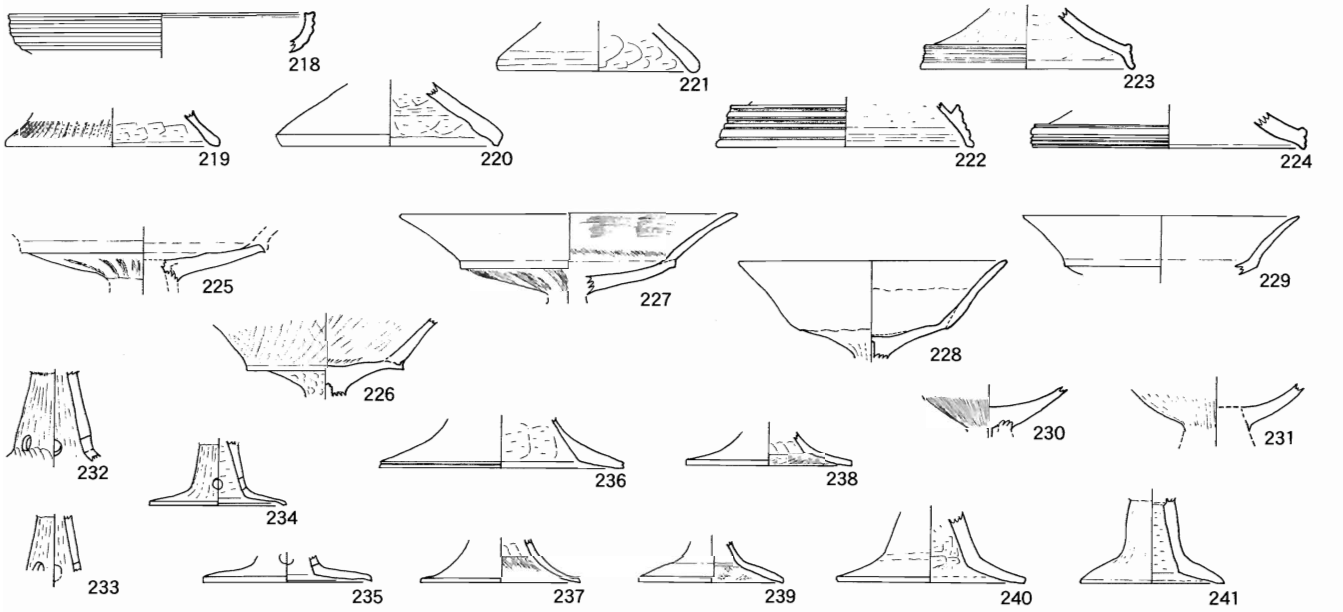


図17　遺　物　図（13）

底はナデ、口縁部はヨコ～斜めのハケ目が残っている。228は風化で不鮮明であるが、内外ともナデのようであり、側面の稜は鈍い。焼成後赤泥を塗ったかとも思われる痕跡がある。229も内外ナデてともに赤色に塗っている。これらの胎土はいずれも細砂も少なくち密で、筒状の脚を接着した手法のようである。

230・231は坏形も判らないが、坏底部がより丸味で碗形の坏かと思われる。231は脚部が接合部から剥離していて、坏底に孔をつくり太い脚頭を嵌めた手法が判る。230は坏底に筒状脚頭をあて圧着したものである。この2点は坏底から接合部へ強くハケ目がみられる。

232～241は脚部で、筒状の下端で強く屈折して裾が強く開く形姿である。外面は232～237がミガキ、238～241がナデである。内面の筒部は232・233がタテケズリ、234・236～241はヨコケズリで、裾部はさらにナデている。下端はかえり状に短く下尖りをつくる234・235・237と切面のみで終わる236・238～240があり、大形の236はこの面に1条の沈線を巡らせている。241のみは伏せ碗状にしている。また筒部下部の屈曲部近くに、直径7～9㎜の円孔を表裏1対に穿つ232～235がある。

225～240の一群は、暗文・ハケ目・強く屈曲する裾部と円透し孔などの特徴から、小形丸底壺などとともに古墳時代前期の所産といえる。なお241の脚部はその形姿から若干先行するものかもしれない。

D　台付坏等（図18）

242は碗形をなす坏に大きく踏んばる台の付くもので、胎土は微砂を多く含みち密であり、内外ともナデ、台裏も入念にナデている。243もほぼ同様であるが、台がやや立つ形のもの。244は台部分とみられる破片で裏もナデ、蓋形土器のつまみではなさそうだ。これらは古墳時代前～中期頃であろうか。

245はヘラ切り平底の坏で、内面は指圧状のナデ痕が著しい粗略なもの。これは新しく7～8世紀ごろと思われる。

246は甑の破片で、胎土に粗砂多く肉厚で、外面はタテハケ目を基調にし、内面はケズリで同一個体の各部位である。口径30cm余で口端はやや厚くしてナデ、その内面はヨコケズリ。胴中央あたりと思われる部位では直径は口径と同じでタテハケ目、内側は大きくタテケズリ。下胴部は漸次窄んで器壁は薄くなり、ハケのちナデ、内面はケズリ。下端に近い受けタガ部は太い粘土帯を貼付けてタガ下面を水平につくる。これから下はソケット状に狭くするもののようだ。ま

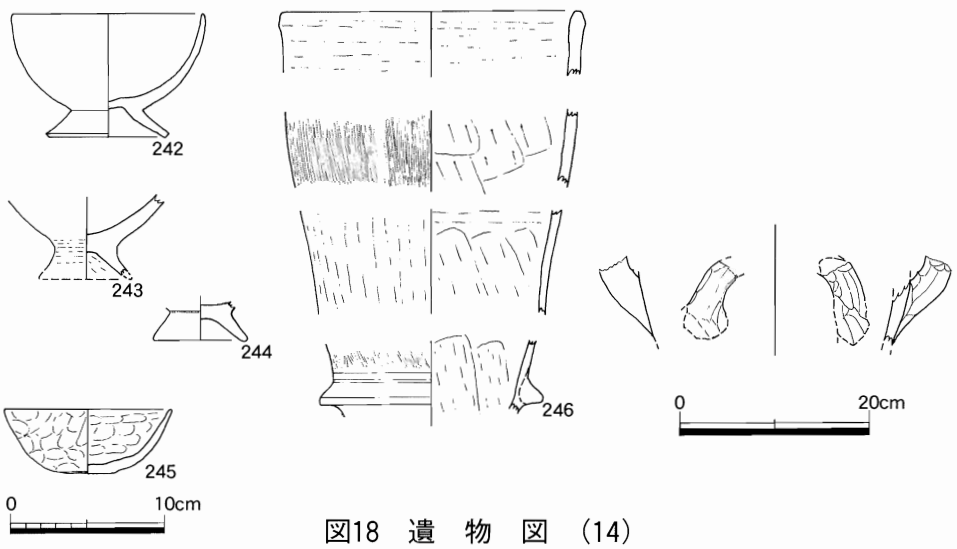


図18　遺　物　図　(14)

た斜め上向きに付く半環状の把手片もあるが、取り付け部位は明確でない。胴半ばより若干下方にあたるのであろうか。器高の復元は難しいが、少なくとも50cm位にはなるだろう。なお把手は一般にタテ又はヨコ位置に付く事例が多く、本例のように斜上方向きにつくるのは初例であろう。この器も通例のように古墳時代前期あたりに考えたい。

E　須恵器・他

247～251は蓋坏である。

247は口径13cmの蓋で、天井は広く削り界線はなく、体側はナデで口端は尖り気味としている。249は口径10cm弱の小形化したもので、天井との界は明瞭でなく体側がナデが広い。248は薄手の蓋で、内外全面ナデている。中心部を欠くが、つまみが付くのであろうか。

250・251は立ち上りの付く坏身で、250は器径15cmで、立ち上りは短く強く内傾している。251は器径11cm余で、立ち上りはほとんど横向きとなり、受け部よりあまり高くならない。

246・249は山陰編年のⅢ期のうちであり、249・251はⅣ期に入るもの。247はさらに下って奈良時代に入るだろう。

252は碗形の坏部片で、口端がわずかに外尖りにつくるもの。内外ナデである。高坏であるのか、高台付であるのか不明。いずれにしても奈良時代とみられる。

253は他の遺物と異なり、その後に堆積した上層土中に含まれていたもので、回転糸切り底土師質土器の細片であり、器形は不明確だが大まかに中世とみてよかろう。

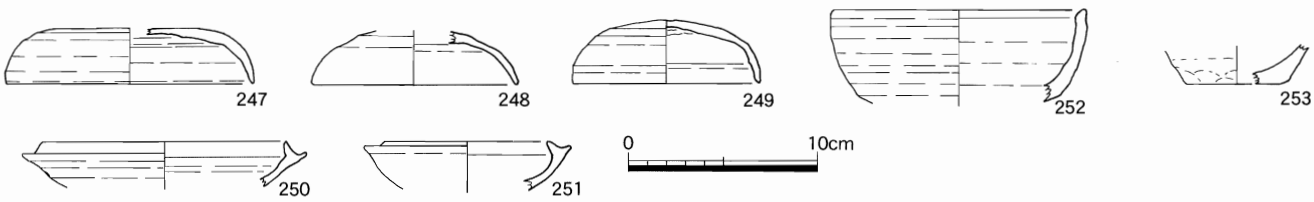


図19　遺　物　図　(15)

F　小結

図示した250点余の土器について概観するとおよそ次のようである。

総数の約４分の３にあたる壺・甕類については、特に様式の目安となる口縁部分に着目すると、最も古いのは弥生前期半ばから見られるが、弥生中期半ば以降古墳時代前半の間が大部分を占め、そのピークは弥生時代後期にあるようだ。ススの付着するものも多く、日常生活の用具である。

高坏についてもほぼ同様で、弥生末から古墳前期の間に集中がみられ、この時期には小形丸底壺も伴っている。また弥生後期半ばの鼓形器台も多い。これらの大部分は在地様式である。

特記すべきものとして、弥生末～古墳初期とみられる小壺のスタンプ文様がある。巴文は極めて希例であり、く字状文様は初見である。また甑形土器の把手が斜め上向きの半環状であるのも初見であ

る。

須恵器の出現する古墳時代中期後半以降は極めて少なく、奈良期へかけては須恵器の蓋坏片等が6点のみである。

以上はすべて同一包含層からの出土であるが、さらに上の堆積土層中からは中世の土師質土器1点が認められた。

2　石礫器（図20）

採取した石器類は石礫器が主で、調査区南側の高位置からが多い。

1・2は扁平やや長円形の浜礫で、長さ8㎝厚さ2.5～3.0cm、200g前後の細粒質砂岩（1）と暗青灰色の安山岩系（2）のものである。いずれも扁平な一面のみが磨耗して滑面となっているもので、掌に納まるほどの磨石である。

3～5は正円～亜角形の両面平坦な浜石で、いずれも1kgほどの青灰色凝灰岩質である。表裏両面の中央を敲打によって窪みとし、さらに3は片側面、5は両側面に広く敲打面がある。4は一部割れ欠けている。いずれも凹石・叩石である。

6・7は長円形やや扁平な浜石である。6はやや軟質の砂岩で690g、長さ14cmの両端に破損があり、下端に2×0.5cmの叩き潰れ面がある。7は中ほどで折れ、現存部は340gで、淡青灰色の砂質凝灰岩である。長端中心よりわずかに偏って2×1㎝の叩き潰れ面がある。8はやや青灰色がかった玄武岩質の円礫で380g、下端に中心から偏って2.5×2㎝の叩き潰れ面がある。6～8はその一端のみを常に用いて強く叩く作業を行った叩き石である。

9は“なまこ”形をした浜の自然礫で、長さ16cm、925gの淡黄灰色ち密軟質な泥岩質の石である。丸味の表面に直径1.5～2.0cmの正円形穿孔状の穴が4穴あるもので、水中で砂粒などが水の渦巻きによって自然に穿孔したもので人工を加えたものではない。「甌石」とも呼ばれ、約2㎞の日本海岸にもあり、奇石の一つとして江戸時代には“お止め石”とされていたという[註8]。本品もそのあたりから搬入したものと思われ、何らかの祭祀に用いたのかもしれない。

10は板状に剥離した粘板岩の一辺を両刃状に研磨したもので、幅6㎝、長さは6㎝ほどで折損している。刃に調整痕があり、穂摘みの石包丁とみられる。

11はサヌカイトと思われる材質の打製石器で、高さ10cm、幅5.7cm、140gの一見斧形である。底辺ほぼ直線部から湾曲するあたりまで粗略に刃部調整していて、研磨は全く行われていない。小形の打製石鍬[註9]であろうか。

12はやや角柱状で長さ15cmの凝灰岩を用いた中砥程度の砥石である。隣接する2面が砥面で、他の2面は割りのままである。1面は凹形、他面はほぼ平面に砥減りしており、各面には中央に条砥ぎの溝が複数ある。石器用であるのか鉄器に用いたかは不明。

このほか図示していないが、黒曜石剥片5（1～19g）とサヌカイト剥片2片（16・37g）も採取した。

以上の各石礫器の使用年代は、散布する土器の年代内ではあろうが特定できなかった。

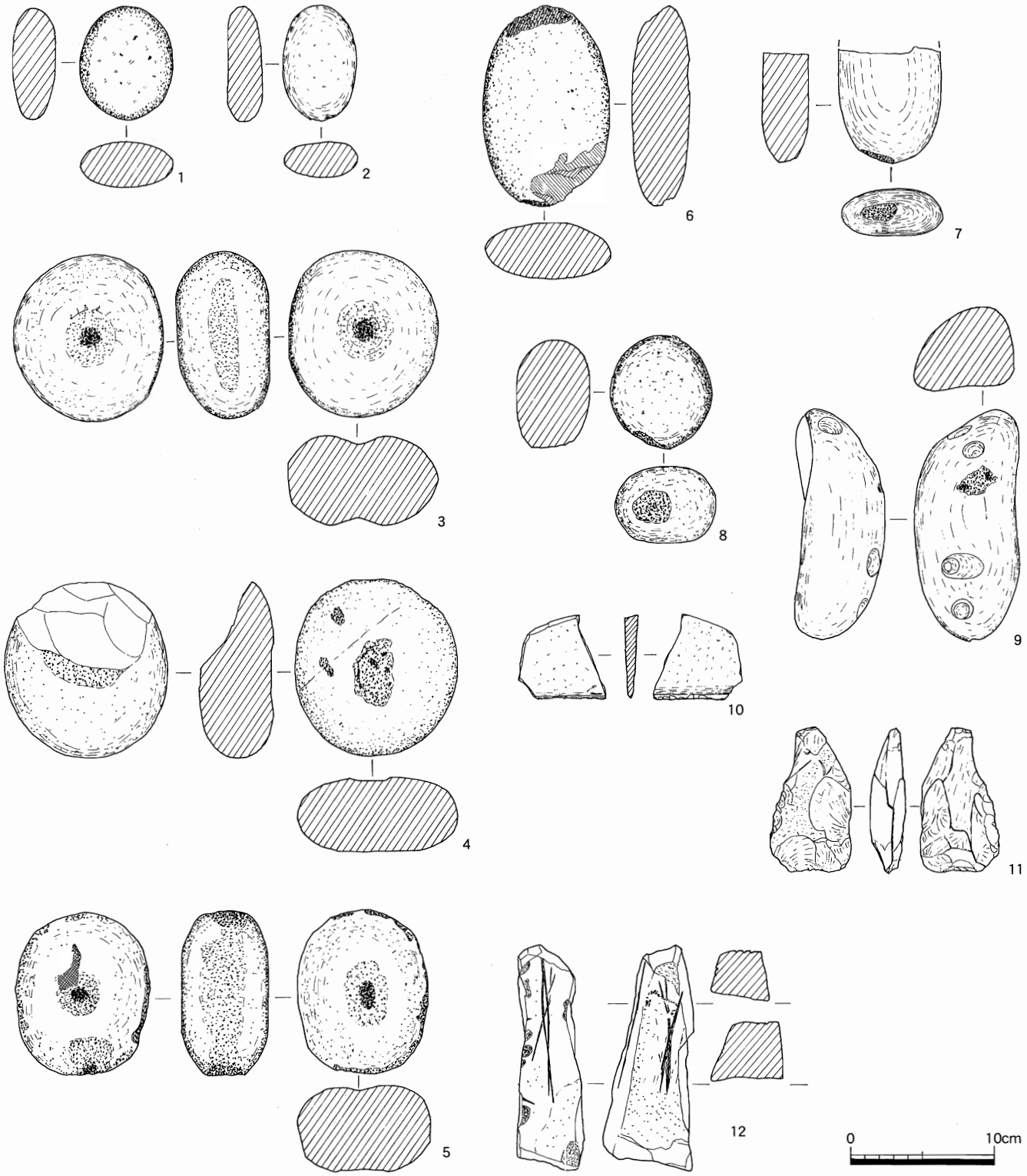


図20　遺　物　図　(16)

3　木製品等（図21）

木製品や流木等は遺物分布面の地下り北端部で集中して検出した。一部のものについて別途に樹種判定を試みた[註10]。

1は杉材をやや柾目状に用いたタテ31.5cm、ヨコ幅推定26cm、隅丸方形で、厚さ2.0～2.3cmの田下駄である。表面はちょうな削り、裏面は割り剥ぎのままであり、緒孔は4穴で丸くタテ9.5～10.5cm、ヨコ約12cmを測る。緒孔径は2.0～2.5cmでいずれも迎え削りである。

2もほぼ同様に表面削り、裏面割り剥ぎの杉をやや板目どりに用いたもので、長さ31.0cm、厚さは1.9cm、幅は割れて残った部分で12cmを測る。この残存部には迎えのある穿孔2つがあり、いずれも0.9～0.7×1.2～1.6cm横長長方形の孔である。この孔は鑿を用いたものであろう。

3は杉材を板目に用いた浅い刳り盆状の製品で割れ欠けている。外縁部も割れ剥げたものかとみられる。盆状のものとみるならば内削りはやや粗略気味であるが、底面は入念に削り均している。この削り仕上げ面からすると表裏が逆で、何らかの蓋状のものであるのかもしれない。

4は杉材の厚板で柾目に用い、長さ36.5cm、一辺が割れ欠けていて現存の幅は6.5cm、長さ1.3～1.7cm、半ばから削り細めて柄状にしたもので、一見羽子板状である。表面と側面は使用による磨耗で滑面であるが、裏面は割り剥ぎ状を呈している。柄状部分は側面に丸味をつくるもので握り部とみられる。この形状は民俗例の茅屋根葺きに用いる茅“タタキ”によく似ているが、本品は大きさが小さい。

5は杉の薄板を用いた部材片である。幅3cm厚さ0.6cmの板で、直径0.9～1.1mmの円孔が6.6cmの等間隔に穿ったもので5穴が認められる。右端は焼け焦げて失われ、左端は折損している。どのような用・器具の部材であるのか不明。

6は厚さ1.2cm片面削りの杉板に、18.0×3.5～4.0cm間隔で4穴の枘穴を穿ったものである。枘穴は1.2×0.7cm長方形で、用途不明の部材である。

7は広葉樹材の4.0×2.0cm平角材で、柾目に用いて幅0.7cm角形の枘穴1つが見られる。両端折損していて全形は不明。現存長18.5cmである。樹種については小口断面で年輪密、管孔材で放射組織は細かく導管は粗に単列であり、ケヤキかヤマハゼかと思われる。

8は直径5.3～5.4cmの棒状に削ったもので、左端を“コケシ”状或いは桿頭状に粗く一刀削りで加工している。半割れで長さ13cmの残欠であるが、握りと縄掛りの部分が見られる部材である。しかしその擦痕はあまり明確ではない。用途は明確ではないが、出土類似例[註11]から織機の“千切（チキリ）”又は“千巻（チマキ）”とみることもできよう。材は年輪やや不明瞭、導管は一様に散在し放射組織も微小であることから、低湿地に多いサワグルミ[註12]のようである。とすると木工芸に多く用いられる材といえよう。

9は杉と思われる材質の長く割り剥ぎしたもので、長さ約1.0cm、断面3.5～4.0×1.8～2.0cm、やや台形をなすもので、上端は直角に切断しているが、下端は薄くなりながら先端が折れたもののようである。全面やや磨耗している。使途は不明。

10は2点いずれも4面割り剥ぎの平角状のもの。断面大略4×2cmで、両端を斜めに一刀削りに尖らす。なお右の1点は中途で折損している。これも使途不明のものである。

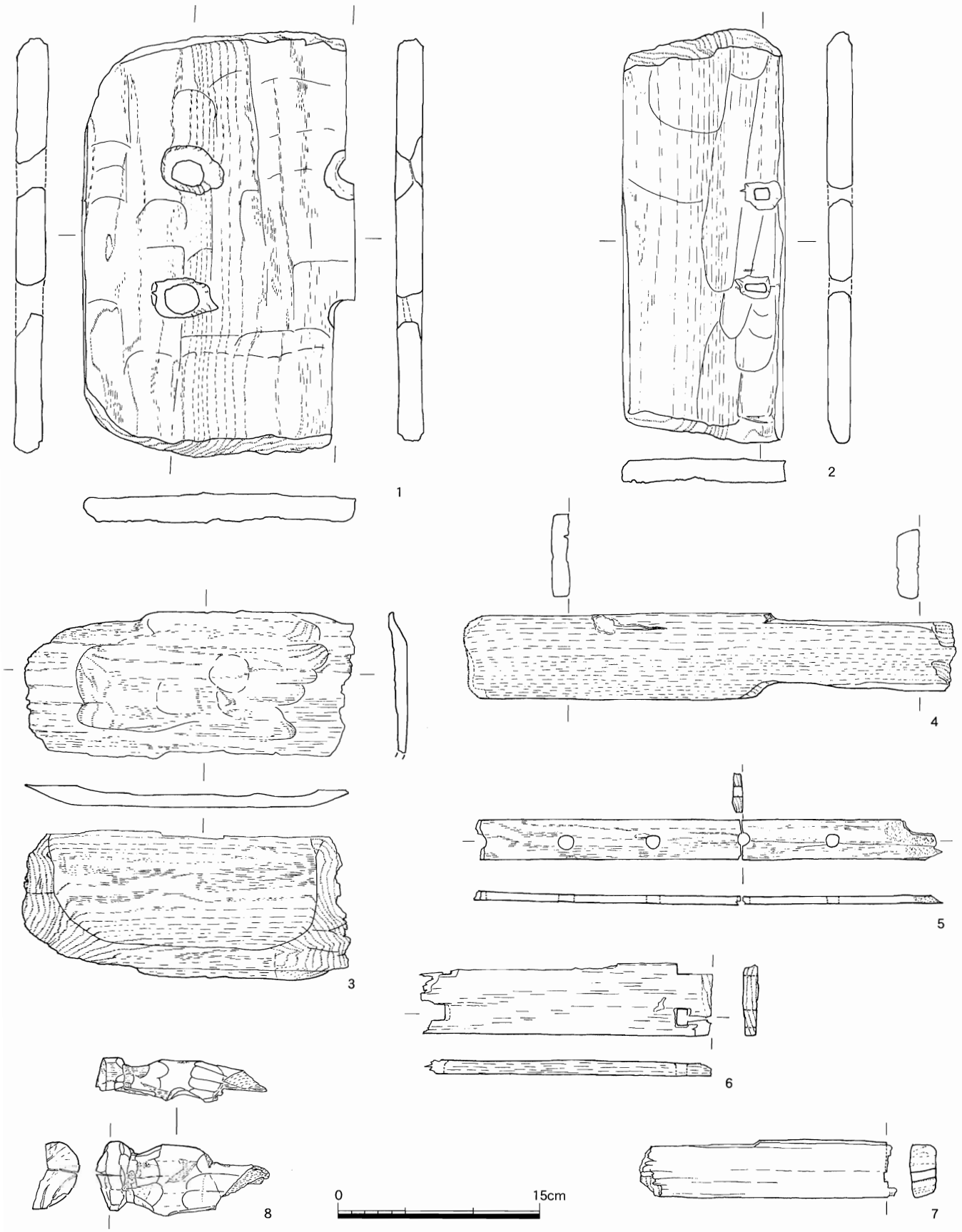


図21　遺　物　図　(17)

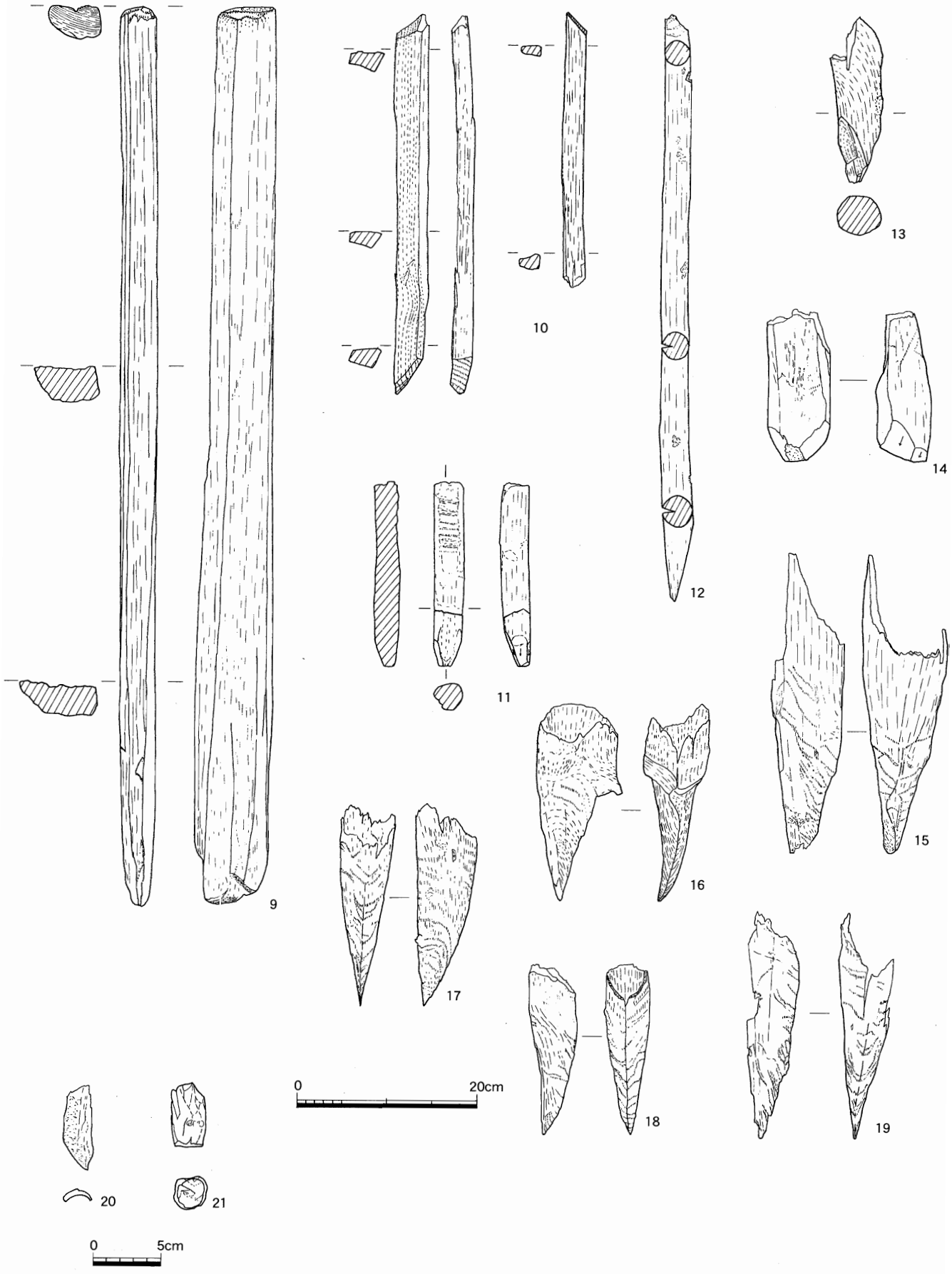


図22　遺　物　図　(18)

11の材は微細な導管がやや粗に散在し、放射組織もあまり著しくないものでイタヤカエデかと思われる。小径木でつくったもので、長さ20cm弱で折れている。端部はやや片尖り状に粗く削り尖らせたもので先端は潰れている。材のわずかに反りのある面にわずかな削り面をつくり、その面に底幅４～８㎜の極く浅い削り溝を横断方向に連続させる加工を施している。この加工部分に擦過痕等使用のあとはみられない。使途不明である。

12はクリの小径材を鋭角に一刀切りしたものを若干先削りしたもので、小杭又は突き棒状のものである。残存長約65cm。

13はカエデ類かとみられる散孔材の小径木で、杭端部が２面削りの尖頭である。14はクリ材の割りもので、端部はやや鈍角に粗く鉈削りしている。杭端とは思えないが何の部材であろうか。

15～19はイヌマキ[註13]とみられる材の鋭く尖る端部片である。断面は背が丸く、腹部は極めて鋭角をなし、直線的なもの15・18・19と曲がるもの16・17がある。さらにこのいずれもが中空で、一見牛角状をなしている。これらはすべて削り等の加工痕は全く判別できず、外面全面が水流に晒されたように年輪部分のみ突出し、柔細胞部分は強く浸蝕されている。また材の心部は人工的でなく腐植による空洞化の様相である。これらの状況から、杭端状ではあるが、泥流中にあって永らく研磨されたものと思われる。図示した以外にも同様のものが６点あり、これらは２か所でまとまって出土していることから、例えば水辺につくられた柵状のものの破片かとも思われる。

木質の出土物はこのほか松とみられる枝や、マツカサ（クロマツ）１、アカガシとみられるドングリ11、モモの果核３、クリ果皮１、クルミの果核[註14]１を採取した。

20は長さ6.3cmの獣骨の長管骨片である。直径約2.3cm位であろうか。その下端は鋭利な刃物で斜めに切った面が見られる。外面には泥土が青錆状を呈して付着しており、これをこそげ落とすと鮮やかな群青色の粉質物の付着が見られた。骨体表面は著しく風化している。

21は下端を切断したとみられる太さ2.5cmの鹿角の破片である。上端部は折損しているが、芯部にはやや粗鬆な組織が見えている。基部から1.5cmほど上の側面に直径３㎜強の細い丸孔２つを穿っている。孔は断面Ｖ字で連結しており、紐透しの穿孔かとも思われる。表面は風化が著しくその表面に20と同様鮮やかな群青色の粉質物が付着している。

この２点については井上貴央教授に見て頂く機会があり、

「４Ｅ－14（図No.21）は鹿角（左右不明）、３Ｎ－111（図No.20）はシカ（？）の長骨片（部位不明）です。いずれも藍鉄鉱の付着が認められます。」との所見を寄せられた。思うに埋没中に泥土中のFe^{++}と骨体から溶出したPO_4^{-}とが結合して、微細な藍鉄鉱（$Fe_3(PO_4)_2 \cdot 8H_2O$）の結晶となり付着したものであろう。同様の出土遺物は近くの名分塚田遺跡に事例[註15]がある。

Ⅶ　ま　と　め

中国電力（株）の行う活断層（トレンチ）調査南講武地点において、地表下約70cmあたりから土器片が検出されたため、南講武小廻２遺跡とよんで、急拠埋蔵文化財発掘調査を行うことになったものである。調査対象地点は丘麓に接する水田部分で、南北に長く約20×７mの範囲であり、遺跡の広がり等については不明である。

調査地点は土層序から、かつて水辺でありその後の水運土の堆積によって埋没したところであった。各土層とも概ねシルト～粘土質であり、河川の後背湿地状が復元想定される。土器等の遺物は、南のやや高位から北への緩斜面と、その前方への薄い流下土層中に包含しており、現行水田面下1.8～2.2mにあたる。遺構等は全く見られなかった。

この遺物は弥生前期以降古墳時代に亘る長期間のものが混淆していた。

出土した遺物は土器片2,000点余のほか石礫器28、木質物50余、核果類27等である。出土状況から層位的に年代別把握が不可能なことから土器は様式編年に従った。様式の判別し得る250余点についてみると、初現は弥生前期で、量的ピークは弥生後期にあり古墳時代に続く。これは直近に所在する南講武草田遺跡[註16]のそれに近似する内容といえよう。また最も新しいのは古墳時代終末期のものが数点みられる。なおその後に堆積した上方の土層中からは中世土師質土器１点を認めた。

これら土器のうち巴文やく字状文をスタンプしたものがあり、前者は２例目、後者は初例であろう。

木製品では田下駄や板等を加工した部材片があり、また織機の部材とみられるものもあったが、これらの年代は特定できない。これも土器と同じく近くに所在の遺跡の場合と類似している。

このように遺物は単一層内に包含していることから、この包含層の年代を知るべく２点の試料を依頼して、^{14}C 年代判定[註17]を行った。試料は層下端に近い水際漂着とみられる木杭群のうちから１個、ほぼ同じ位置の包含層上層で、上部堆積土下面から流下漂着したとみられる木炭２片である。結果は前者がAD330年で古墳時代初期、後者はBC800年で縄文晩期であろうか。このうち木杭の示す年代が遺物包含層の出現期を示すものと思われる。

この文化財に関する現地調査終了後に行われた活断層のトレンチ調査の成果[註18]を重ねてみると、当方の調査で木片が集中してかつての水際かとした南東から北西へのラインは、その直下に断層による地形のズレがあったことになる。

遺物の散布状況は、この断層ラインの上方にあたる溝状地形に対して、区域外の南高位置から緩斜地形面上を雨水等によって流下定着し、薄い遺物包含層を成したものとみられ、その年代観は最新の遺物等からして古墳時代後～末期と推察される。

また付近の丘麓部には多くの遺跡が分布する。本例もその南後背直近に弥生時代以降の遺跡の存在を示唆して１例を加えたことになる。

註1　付編Ⅰ　粒度分析結果参照

2　松本岩雄：『弥生土器の様式と編年－山陽・山陰－』木耳社　1992

赤沢秀則：『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書５－南講武草田遺跡－』鹿島町教育委員会　1992

3　東森・杉原：『沢田宅裏・鑓免大池・渋谷遺跡』「日焼田１号住居址の土器」横田町教育委員会　1982

4　東森市良：『安来平野の古墳文化』私家版　平成７年

5　例えば『丸子山古墳群』仁多町　1995など

6　遺物図の一部は『角田・又下遺跡』大東町　1988年に所収

7　報告書未刊〝発掘ニュースNo.2〟1980.7.3による。この巴文は単線でなく複線であるが、大きさ形状はほとんど同じである。

8　赤沢氏の教示による。

9　極く近い北講武氏元遺跡によく似た品の出土がある。『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書４－北講武氏元遺跡－』赤沢鹿島町教育委員会　1989

10　PL14参照。判定は貴島・他：『原色木材大図鑑』保育社　昭和55年によるところが主で、若干筆者の現物試料に照合した。

11　西村兵部：『織物』「日本の美術12」至文堂　1967

沢田むつ代：『染織』「日本の美術263」至文堂　昭和63　この２著に掲載の事例による。

12　PL14参照

13　PL14参照

14　PL14参照

15　『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書３－名分塚田遺跡－』「名分塚田遺跡より検出されたシカの骨について」井上貴央　鹿島町教育委員会　1987

16　『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書５－南講武草田遺跡－』　1992

17　付編Ⅱ参照

18　『島根原子力発電所３号機増設に伴う宍道断層周辺活断層調査報告書』中国電力　平成10年10月

付編 Ⅰ

標本土壌の簡易粒度分析

杉原清一

目的　本遺跡の遺物包含層やそれに前後する堆積土層について、それぞれの土層の成り立ちを考える試料の一つとして、簡易な粒度分析[註]を試みた。

試料

トレンチ断面土層図	野外観察土層	層位説明
2層	シルト質壌土	上部堆積土上層
3層	〃	〃　下層
5層	礫を含む壌土	砂礫層中の大礫を除いたもの
9層	礫を含む粘質土	遺物散布面のベースとなる土層
4層	腐植を含む壌土	遺物包含層

方法　供試土は2・3・5・9層土は、有機質による暗色化がほとんどないのでそのまま風乾し、細土10gを供した。いずれも20㎜メッシュのふるいを通過したものについて行った。

以下0.4㎜メッシュまではふるい選し、それ以下は水中沈降法によった。

使用ふるいメッシュ（㎜）　20　4.0　0.4

沈降　水温20℃前後　採取深10cm　　沈降時間　20′　40″　5″

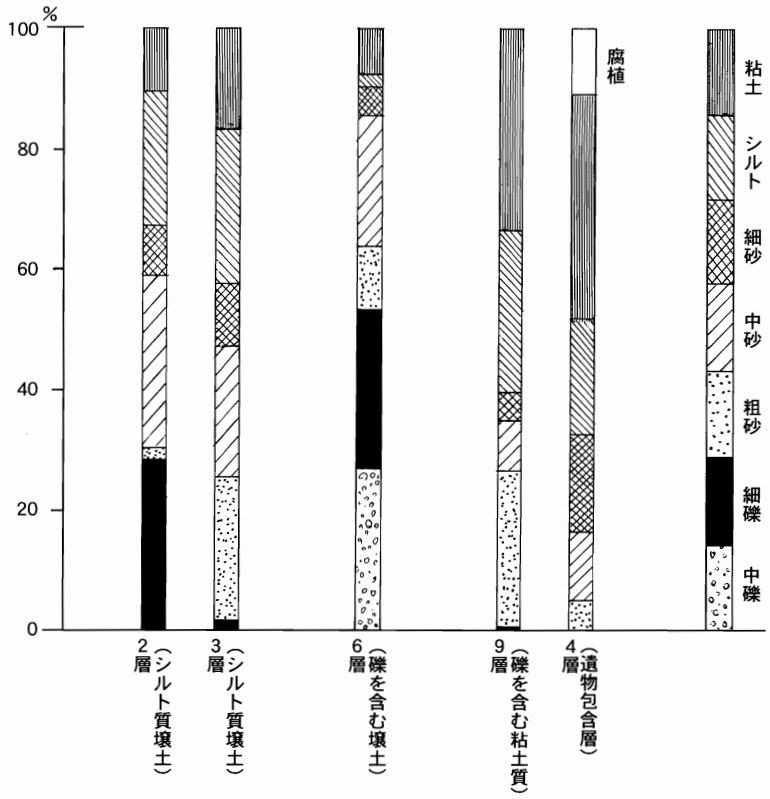
土粒区分は便宜的に次のように区分し、各％で示した。

～20㎜	ふるい	大礫（これは除く）	～5″	沈降	中砂
～4	〃	中礫	～40″	〃	細砂
～2	〃	細礫	～20′	〃	シルト
～0.4	〃	粗砂	20′～	計算	粘土

結果

	中礫	細礫	粗砂	中砂	細砂	シルト	粘土	腐植
2層	0	28.3	1.8	28.7	8.1	22.7	10.4	微
3層	0	1.3	23.9	21.9	10.2	25.9	16.8	〃
6層	26.8	26.9	10.1	22.1	4.5	1.8	7.8	〃
9層	0	0.6	25.7	8.3	5.0	26.8	33.6	〃
4層	0	0	5.0	11.3	16.2	19.0	37.5	11.0

分析結果（%）



土壌の粒度組成

むすび

2層：中～細砂やシルトが多く、長期にわたって緩やかな流れで上流から運ばれた土の堆積であり、湿生植物も繁茂したものとみられる。

3層：粗砂もやや多いが、ほぼ2層に同じ様相である。腐植は強くは認められず草生は少なかったと思われる。この上に2層が堆積することから、2層ほど長期間にわたる堆積ではないようだ。

6層：礫が大半を占めるもので、一時的に急流で運ばれ堆積したものとみられる。

9層：粘土及びシルトが大半を占め粗砂もある土で、水によって運ばれたものではなく、完全に風化した粘質土が崩れ出たものとみられる。

4層：粘土や腐植が多いが9層に近い組成であり、この9層土が雨水等で若干流れ下って堆積したものとみられる。

註　地学団体研究会『土と岩石』 東海大学出版会　1982を主な参考とした。

付 編 Ⅱ

放射性炭素年代測定結果報告

㈱地球科学研究所

放射性炭素年代測定の依頼を受けました試料について、別表の結果を得ましたのでご報告申し上げます。

報告内容の説明

^{14}C age (y BP)　：^{14}C 年代測定値
試料の^{14}C/^{12}C 比から、単純に現在（1950年 AD）から何年前（BP）かを計算した年代。半減期として5568年を用いた。

補正^{14}C age (y BP)　：補正^{14}C 年代値
試料の炭素安定同位体比（^{13}C/^{12}C）を測定して試料の炭素同位体分別を知り^{14}C/^{12}C の測定値に補正値を加えた上で、算出した年代。

δ^{13}C (permil)：試料の測定^{14}C／^{12}C 比を補正するための^{13}C／^{12}C 比。
この安定同位体比は、下式のように標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表現する。

$$\delta^{13}C\ (‰) = \frac{(^{13}C^{12}C)\ [試料] - (^{13}C^{12}C)\ [標準]}{(^{13}C/^{12}C)\ [標準]} \times 1000$$

ここで、^{13}C／^{12}C ［標準］＝0.0112372である。

暦　年　代　：過去の宇宙線強度の変動による大気中^{14}C 濃度の変動に対する補正により、暦年代を算出する。具体的には年代既知の樹木年輪の^{14}C の詳細な測定値により、補正曲線を作成し、暦年代を算出する。(Stuiver at al, 1993 ; Vogel et al, 1993, : Talma and Vogel, 1993)
ただし、この補正は約10,000yBP より古い試料には適用できない。

測定方法などに関するデータ

測定方法　AMS：加速器質量分析
Radiometric：液体シンチレーションカウンタによるβ－線計数法

処理・調整・その他：試料の前処理、調整などの情報
前処理　acid-alkali-acid：酸－アルカリ－酸洗浄
調整、その他
benzene：Radiometric による測定の際、最終的に試料をベンゼンに調整する

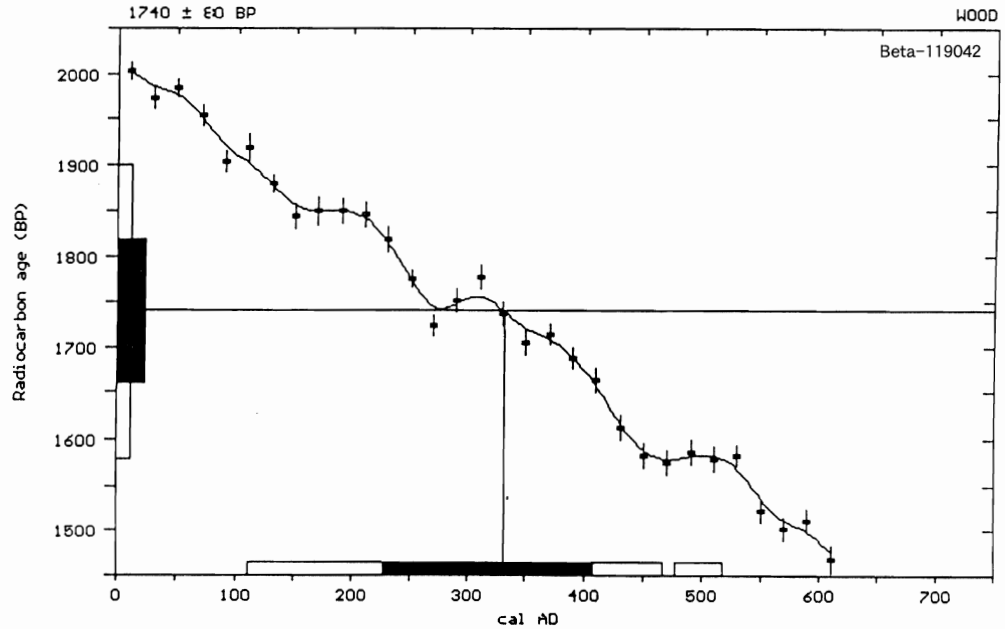
分析機関　：BETA ANALYTIC INC.　4985 SW 74 Court, Miami, Fl.33155, U.S.A

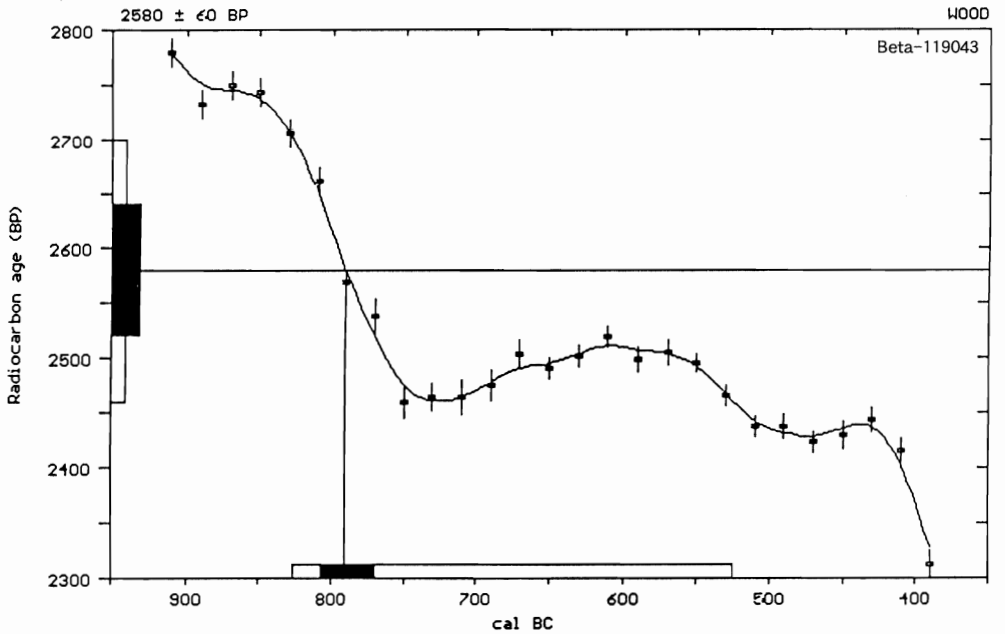
Report of Radiocabon Dating Analyses　1988年７月22日　＊^{14}C の半減期は5568年を用いた。誤差は± 1 sigma

測定番号	試料名	試料種	^{14}C age (y BP)	δ^{13}C (permil)	補正^{14}C age (y BP)	暦年代		
Beta-119042	MK2-1	wood (木杭)	1780±80	−27.8	1740±80	交点	AD 330	
						2 SIGMA	AD 110 TO 465	AD 475
						95% probability	AD 475 TO 515	
						1 SIGMA	AD 225 TO 410	
						68% probability		
整理番号 8947	測定方法	Radiometric	処理・調整・その他	acid-alkali-acid benzene				
Beta-119043	MK2-2	wood (木炭)	2610±60	−27.0	2580±60	交点	BC 790	
						2 SIGMA	BC 825 TO 525	
						95% probability		
						1 SIGMA	BC 805 TO 770	
						68% probability		
整理番号 8948	測定方法	Radiometric	処理・調整・その他	acid-alkali-acid benzene				

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

	(Variables : $^{13}C/^{12}C = -27.8$: lab mult.=1)	(Variables : $^{13}C/^{12}C = -27$: lab mult.=1)
Laboratory Number :	Bata-119042	Bata-119043
Conventional radiocarbon age :	1740±80 BP	2580±60 BP
Calibrated results :	cal AD 110 to 465 and	cal BC 825 to 525
(2 sigma, 95% probability)	cal AD 475 to 515	
Intercept data :		
Intercept of radiocarbon age with calibration curve :	cal AD 330	cal BC 790
1 sigma calibrated results : (68% probability)	cal AD 225 to 410	cal BC 805 to 770





References :
Pretorla calibration Curve for Short Lived Samples Vogel, J. C., Fuls, A., Visser, E. and Becker, B., 1993, Radiocarbon 35(1), p 73-86
A Simplified Approach to Calibrating C 14 Dates Talma, A. S. and Vogel, J. C., 1993, Radiocarbon 35(2), p 317-322
Calibration-1993 Stuiver, M., Long, A., Kra, R. S. and Devine, J. M., 1993, Radiocarbon 35 (1)

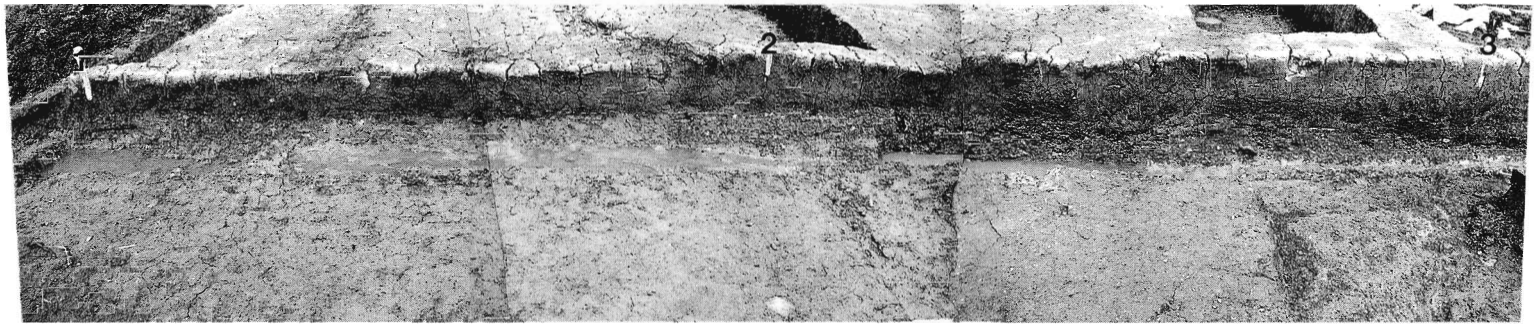
Beta Analytic Radiocarbon Dating Laboratory

発掘前状況

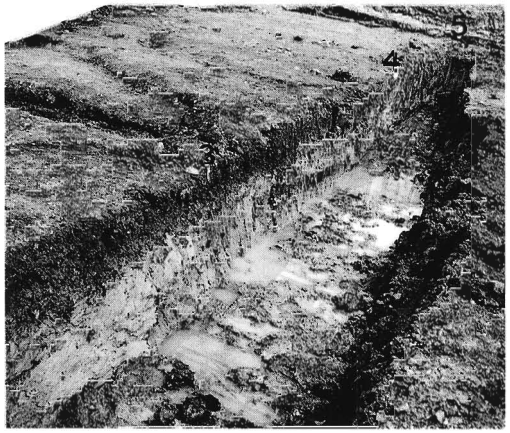
発掘開始

トレンチ設定（北から）

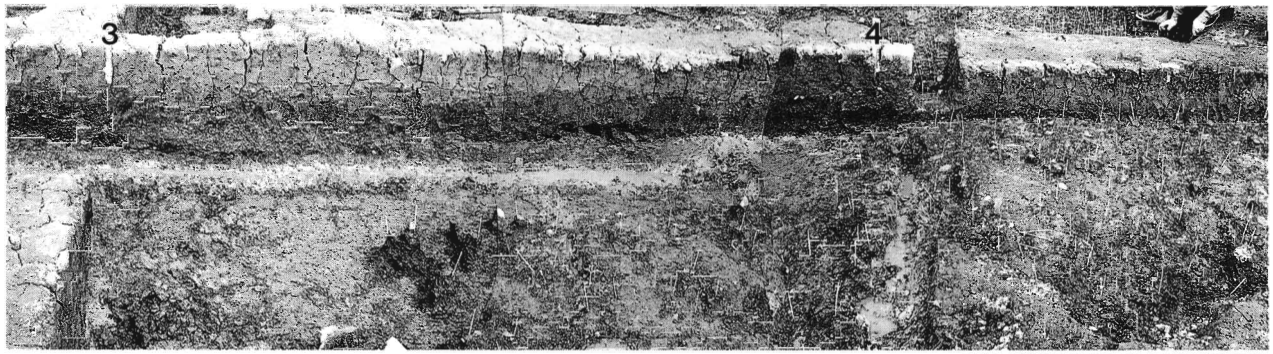
土 層 断 面



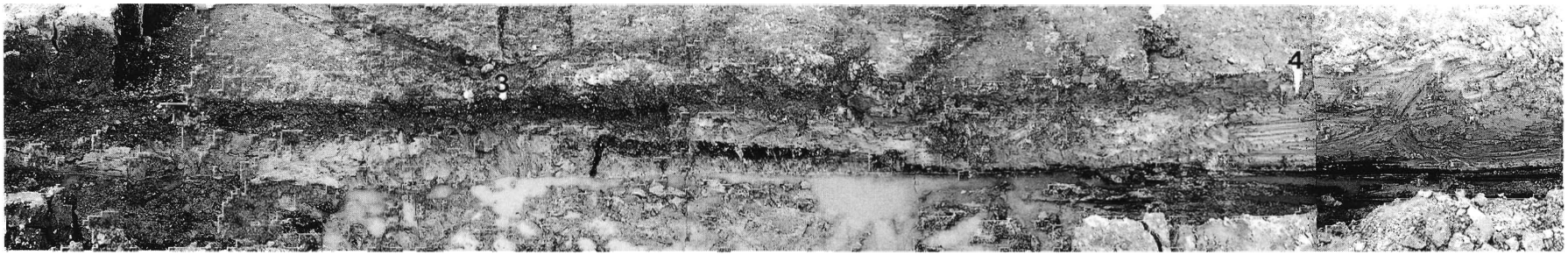
中央縦断トレンチ　1～3杭



完掘後の下層掘り下げ



中央縦断トレンチ　3杭～

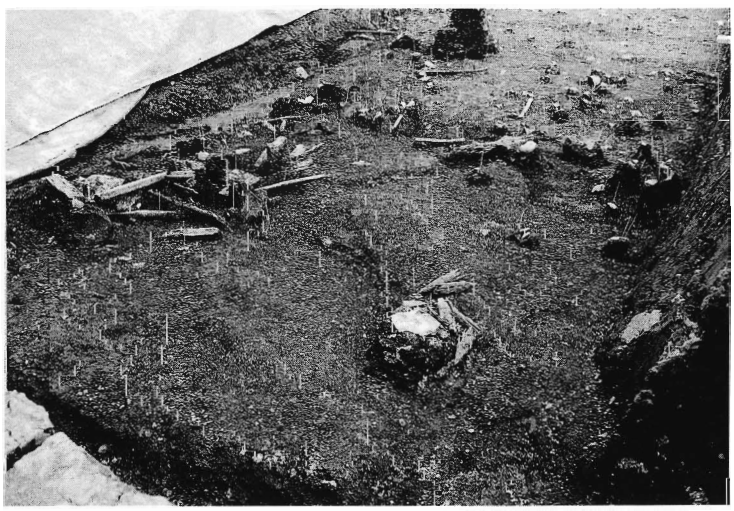


下層掘り下げ　3～4杭付近

遺物散布状況

3W～4W区

4W区



3E区（木製品等）

PL 4

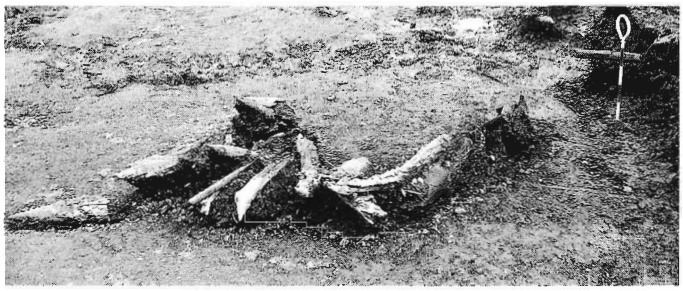
遺物検出状況

土器片（4E区）

凹石（3W区）

甕片（3E区）

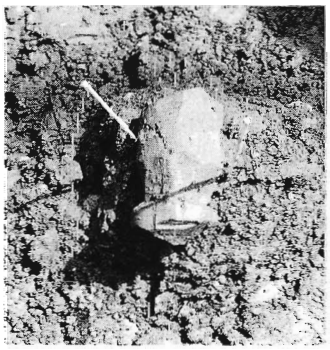
砥石（4W区）



杭材集積（2W区）

板部材（3E区）

田下駄・木製品等集積（3E区）



桿頭状木製品（2E区）

高坏等（4E区）

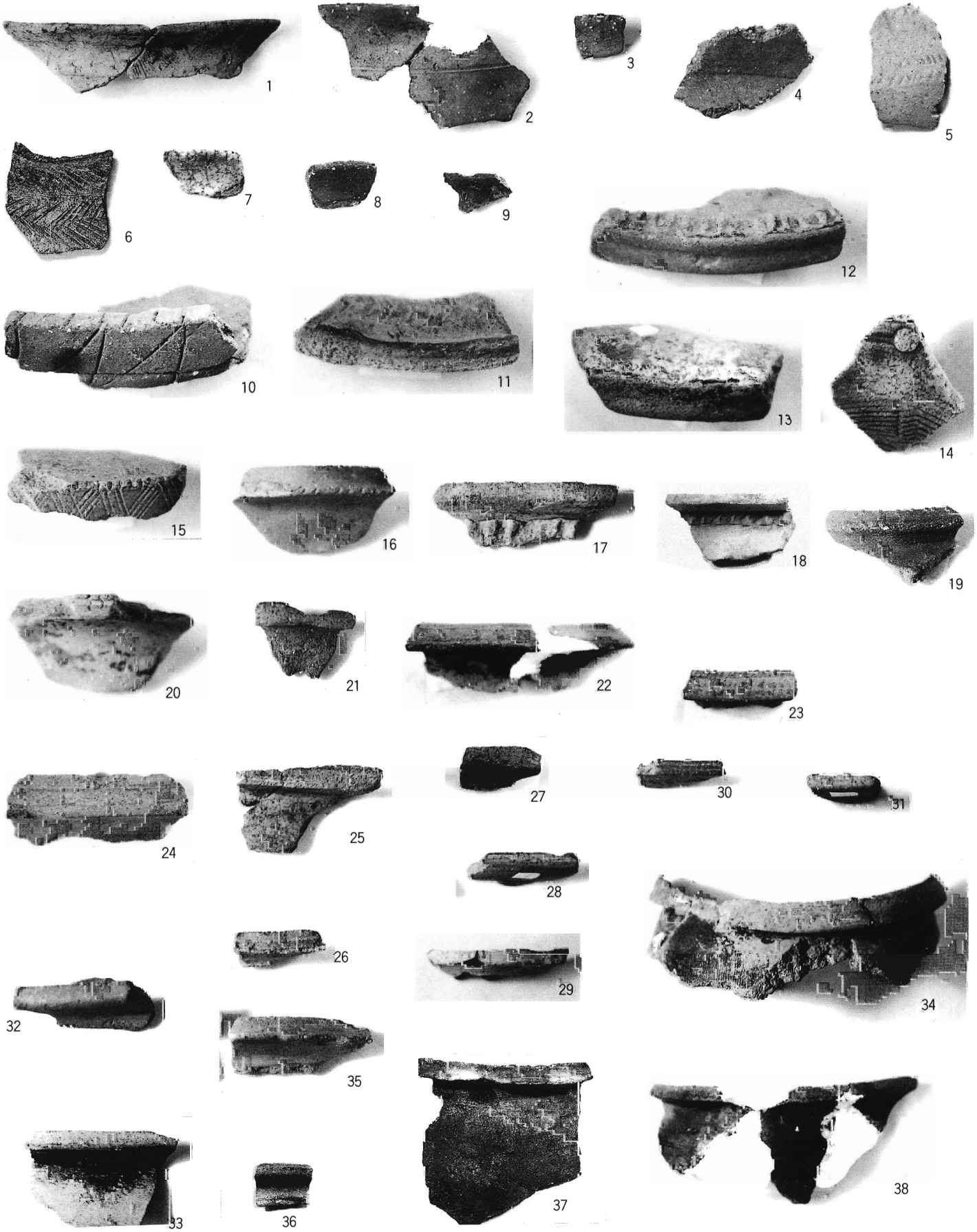
高坏等（4E区）

現地説明会（南から）

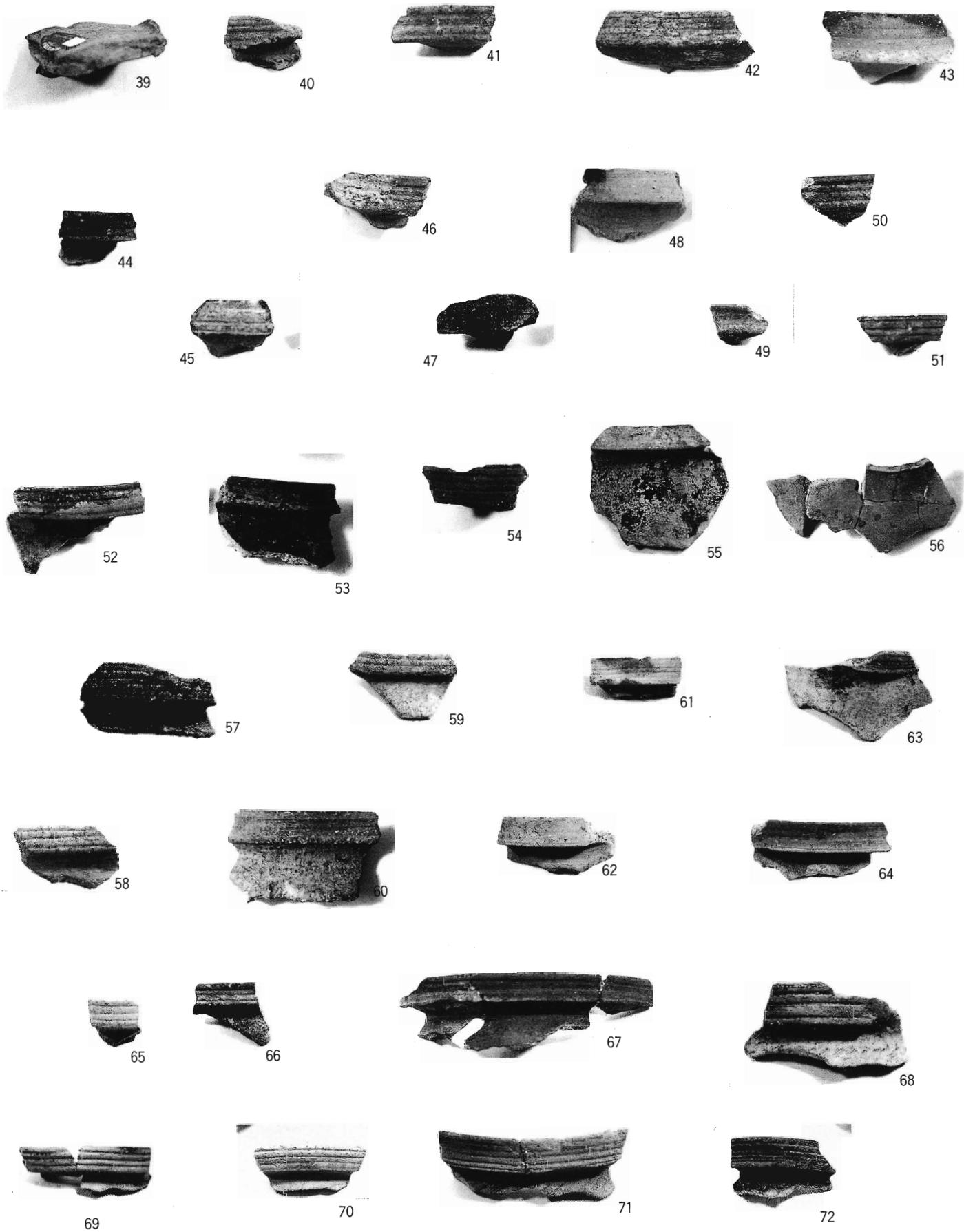
遺物取り上げ後の地形（北東から）

遺物取り上げ後の地形（北から）

PL 6

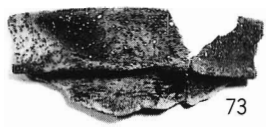


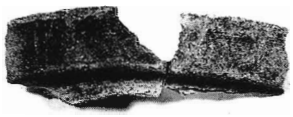
弥生前～中期土器（図５・６・７照合）



弥生中期末～後期前葉土器（図８・９照合）

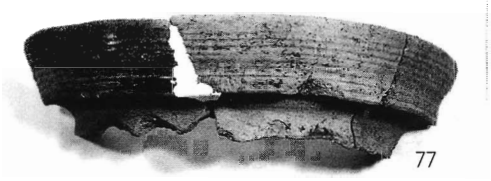
PL 8


73

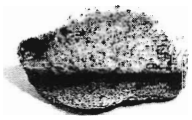

74

75

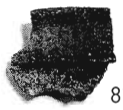
76

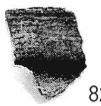

77

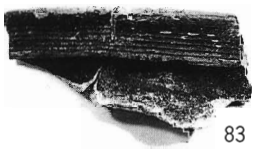
78

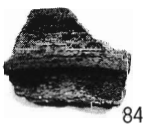

79

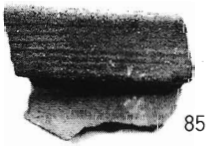
80

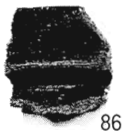

81

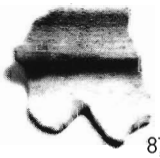

82

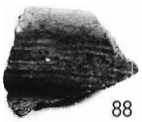

83

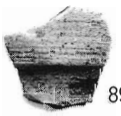

84

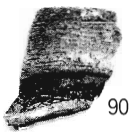

85

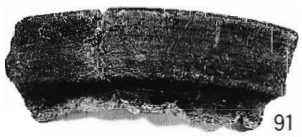

86

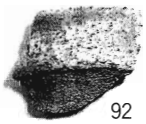

87

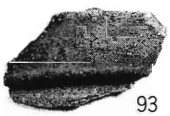

88

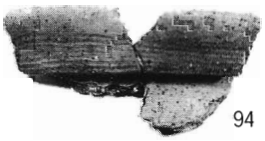

89

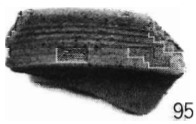

90


91

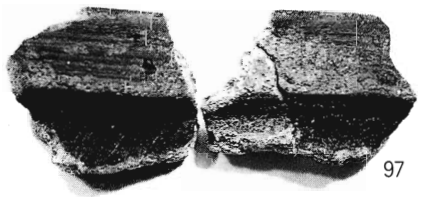

92


93

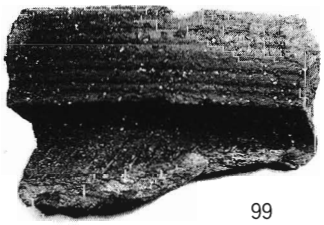

94

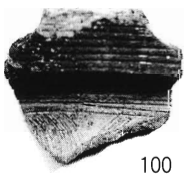

95

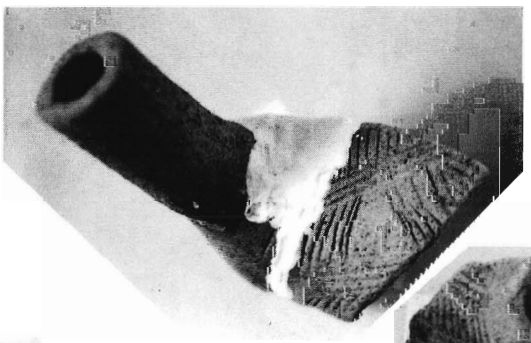
96

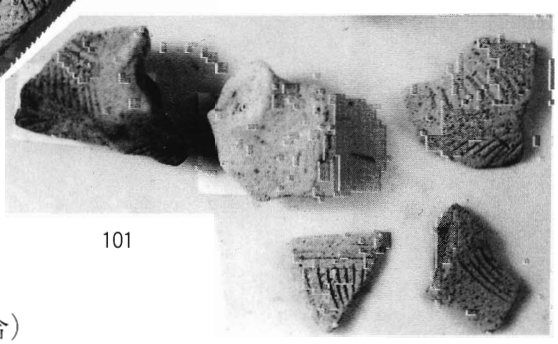

97

98


99

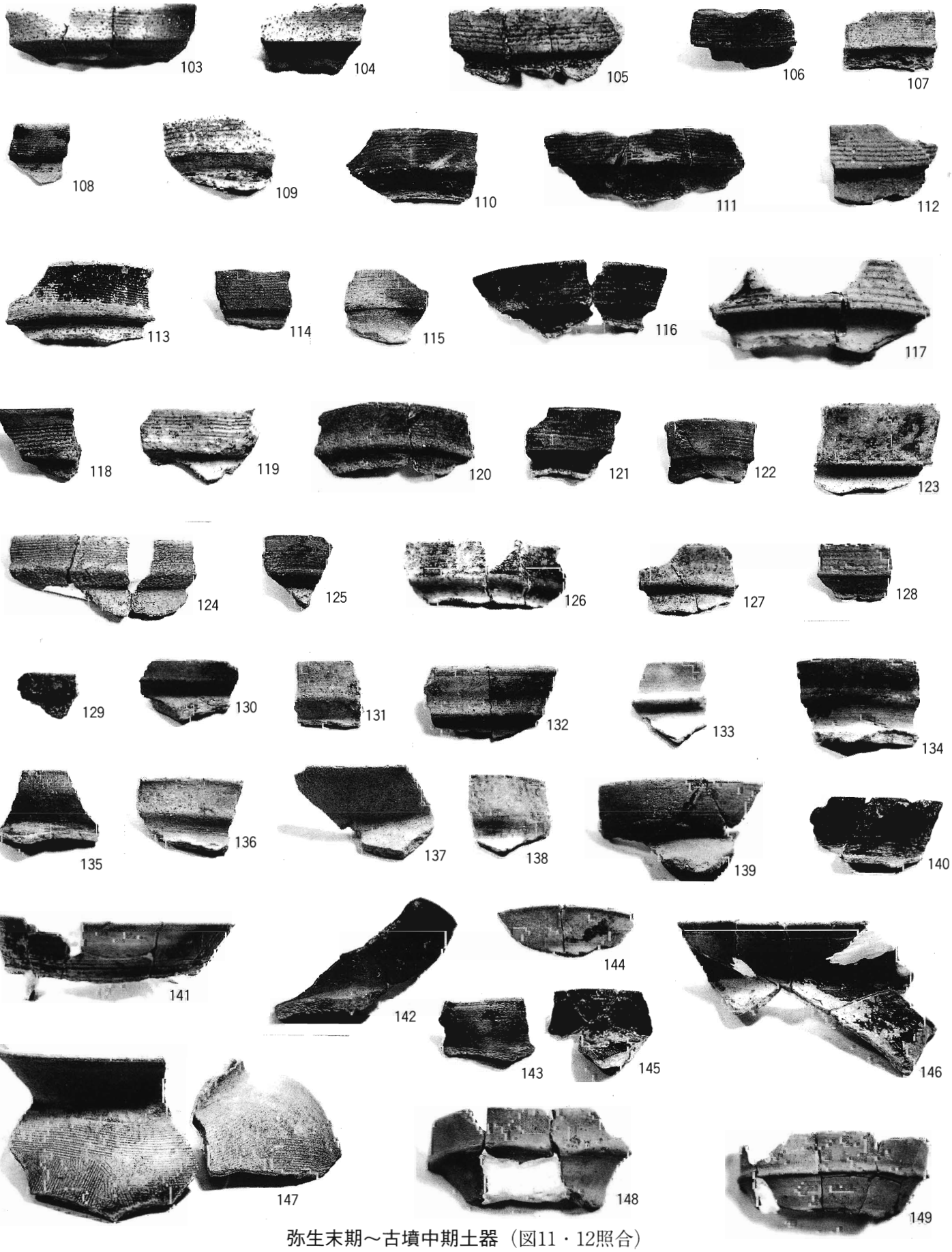

100




101

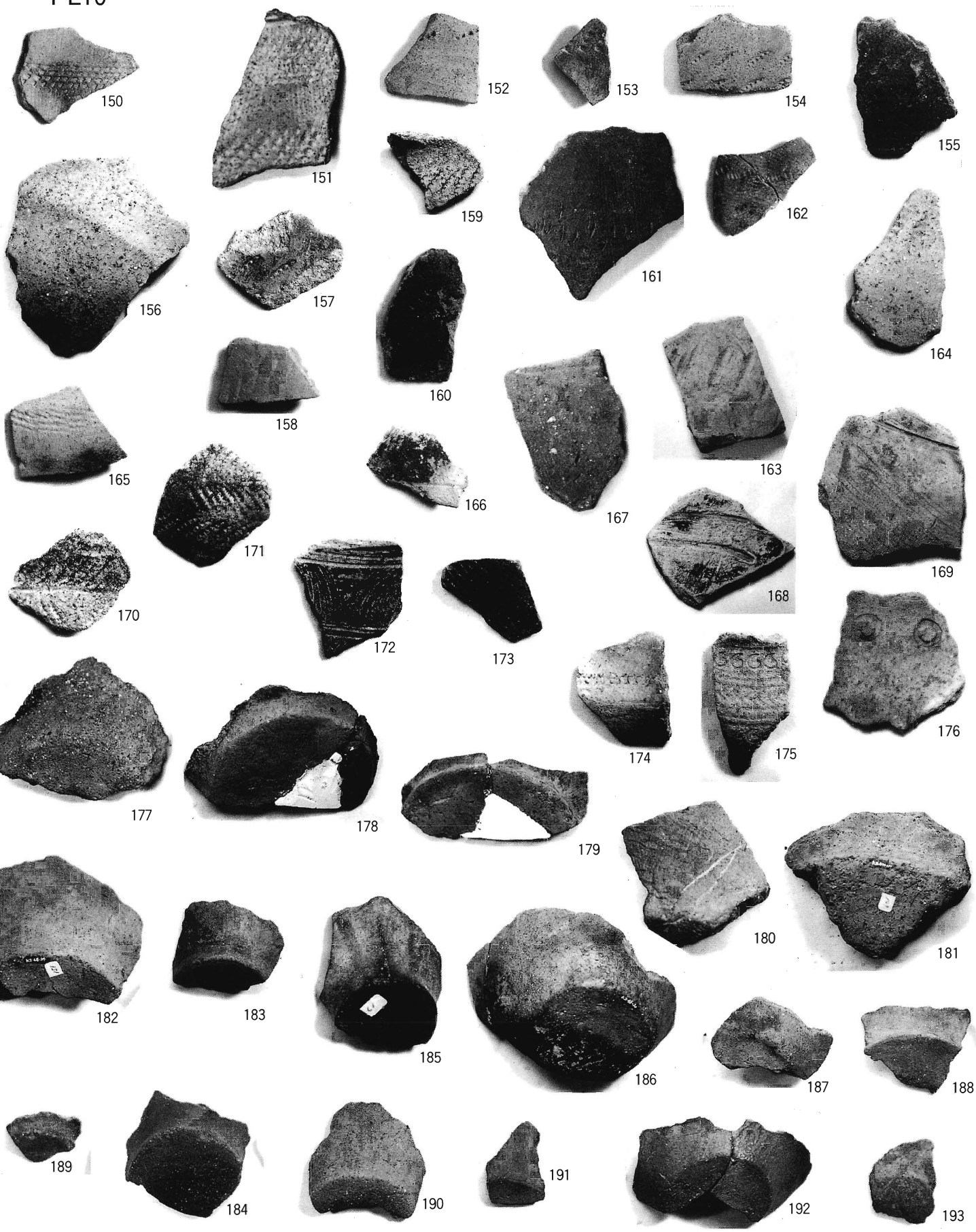
102

弥生後期土器（図10照合）

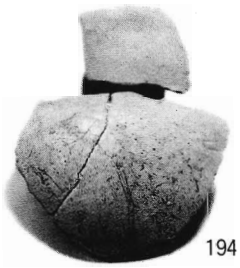


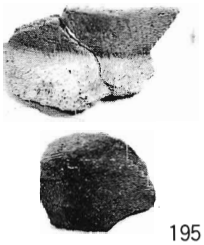
弥生末期～古墳中期土器（図11・12照合）

PL10



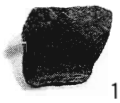
施文・底部（図13・14照合）


194

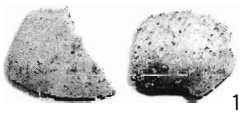

195

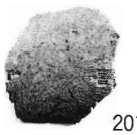
196

197


199

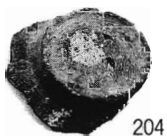
200

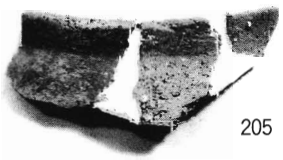

198


201

202

203


204


205

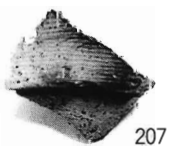
206

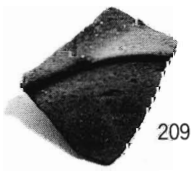
208

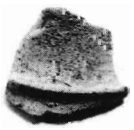
210

211

212


207

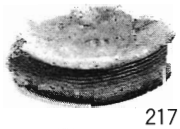

209

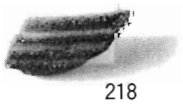

213

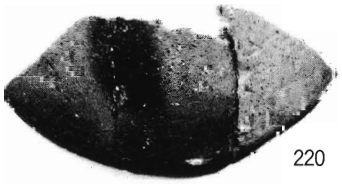
214

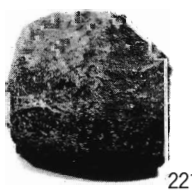
215

216


217


218


220


221

223

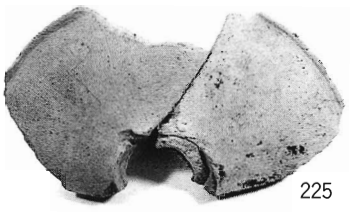
219

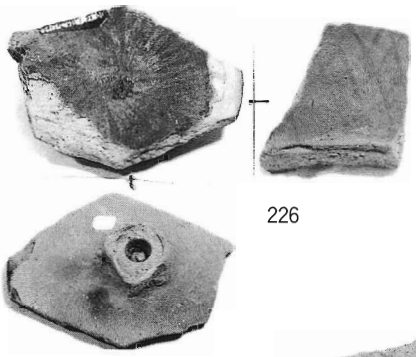
222

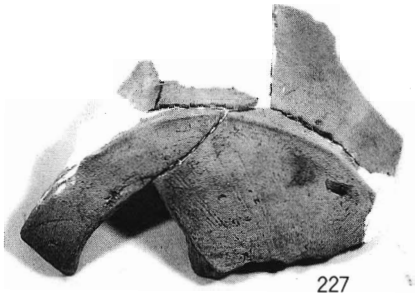
224

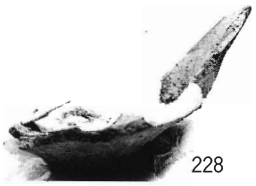
小形丸底壷・弥生期高坏（図15・16・17照合）

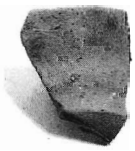
PL12

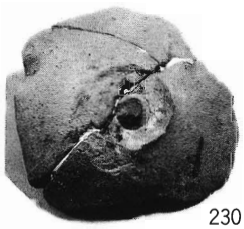

225

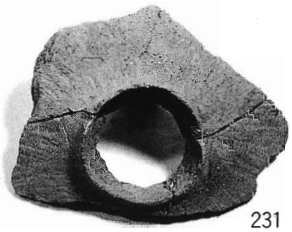

226


227

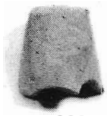

228

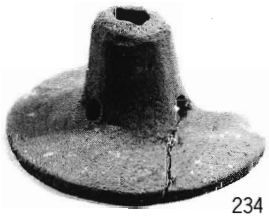

229

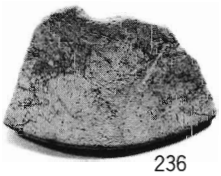

230


231

232

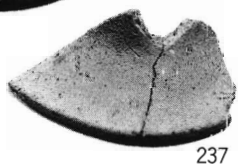

233

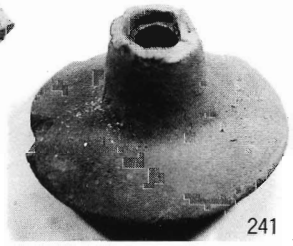

234

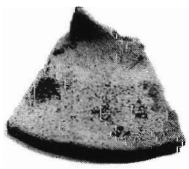

236

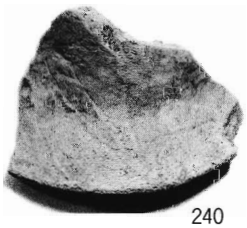
235

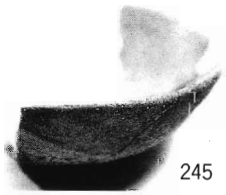
238


237

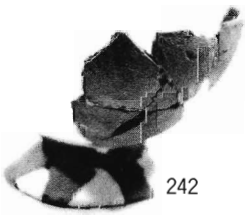

241

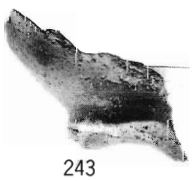

239

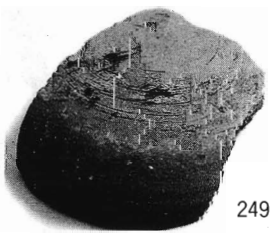

240

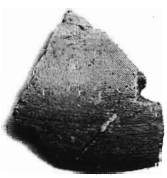

245

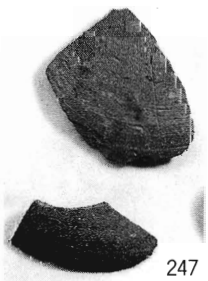
246

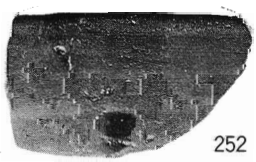

242

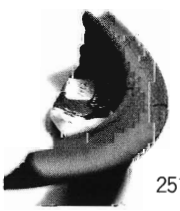

243

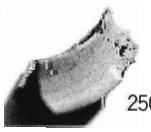

249


248


247

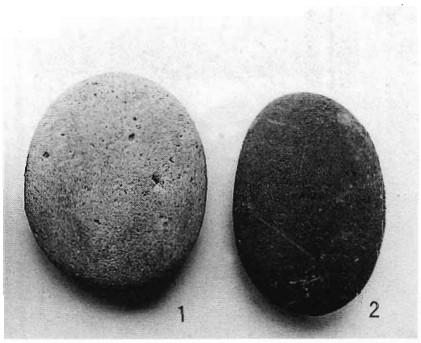

252

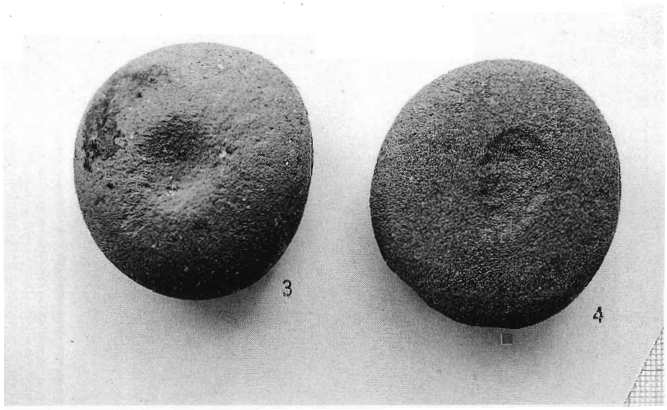

251

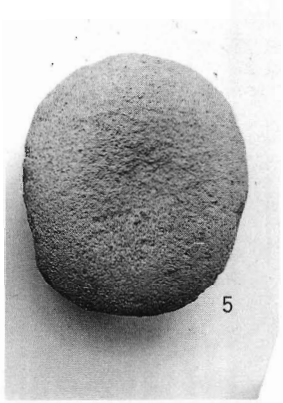

250

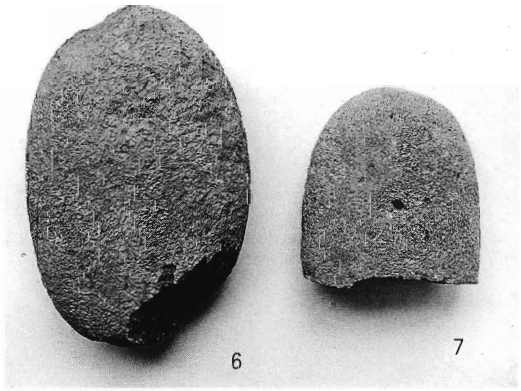
253

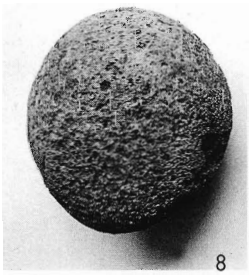
土師高坏・他　須恵器（図17・18・19照合）

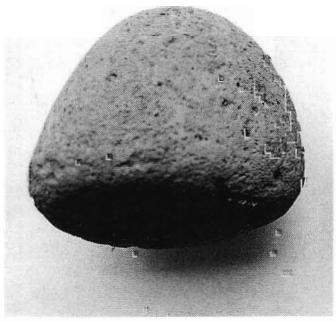




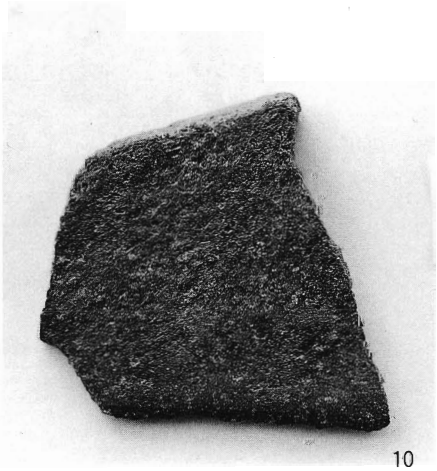


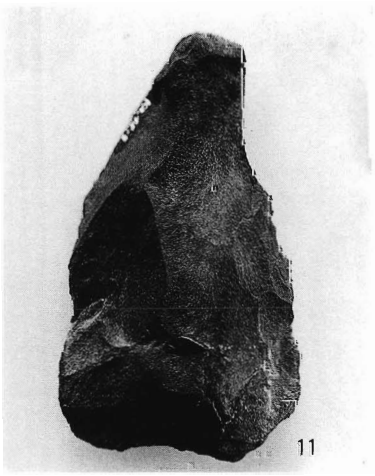




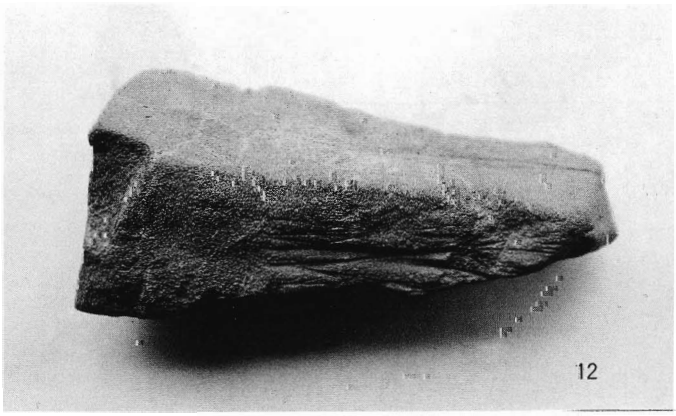


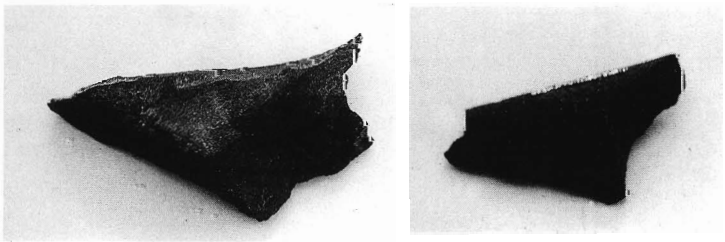
磨　石





黒曜石剥片

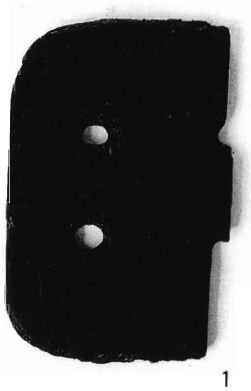


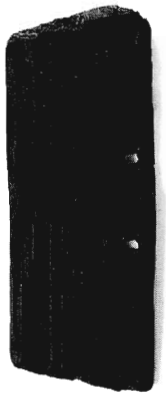


安山岩剥片

石　礫　器（図20照合）

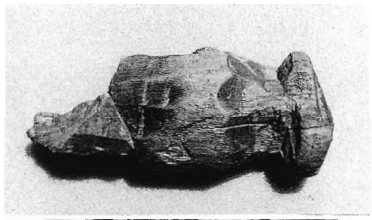
PL14


1


2

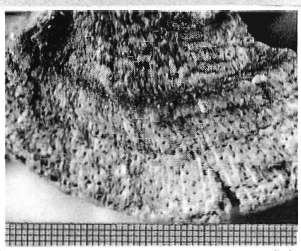
3

4



5

6


8

（サワグルミ　0.1mm 目盛）

9

7

10

11

13

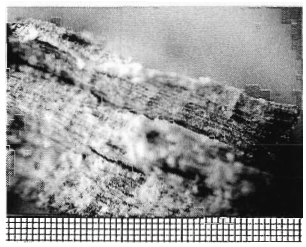
14

15

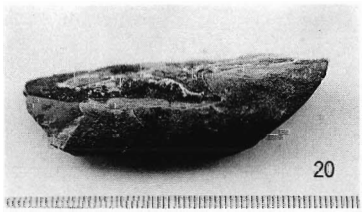
12

18

16

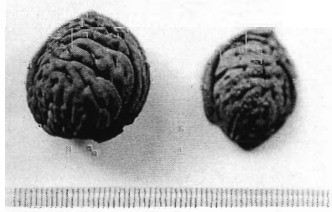


（イヌマキ　1㎜目盛）

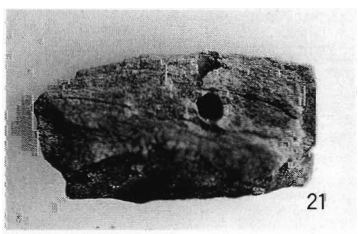

20

（長管骨片　1㎜目盛）

クルミ（1㎜目盛）

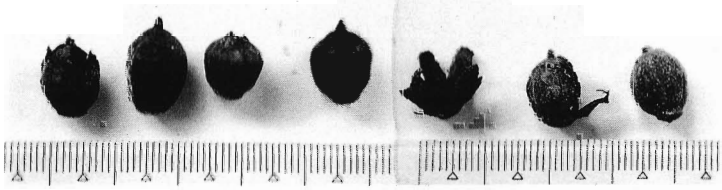


クルミ（1㎜目盛）


21

（鹿　角）

マツカサ



ドングリ（アカガシ　1㎜目盛）

木製品・その他（図21・22照合）

報 告 書 抄 録

ふりがな	ちゅうごくでんりょくかつだんそう（トレンチ）ちょうさにともなう みなみこうぶこざこだい２いせきはっくつちょうさほうこくしょ
書　　名	中国電力活断層（トレンチ）調査に伴う南講武小廻第２遺跡発掘調査報告書
編著者名	杉原清一、藤原友子、赤澤秀則
編集機関	鹿島町教育委員会
所 在 地	〒690－0396　島根県八束郡鹿島町大字佐陀本郷640－１ 0852－82－3211
発行年月日	西暦1999年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 m^2	調査原因
みなみこうぶこざこだい 南講武小廻第２	島根県八束郡（やつかぐん） 鹿島町（かしまちょう）大字 南講武（みなみこうぶ）379	32301		35度 30分 47秒	133度 １分 38秒	19980506 ～ 19980610	100	活断層調査

所収遺跡名	種　　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
南講武小廻第２	遺物包蔵地	弥生時代前期 ～古墳時代		弥生土器 土師器 須恵器 木製品	調査終了後地下から 活断層が発見された

中国電力活断層（トレンチ）調査に伴う

南講武小廻第２遺跡発掘調査報告書

1999年３月

発行　鹿島町教育委員会

島根県八束郡鹿島町大字佐陀本郷640－１

印刷　　株式会社報光社